

平成 28 年度指定

スーパーグローバルハイスクール

研究開発実施報告書

第 3 年次



平成 31 年 3 月

和歌山県立日高高等学校

はじめに

和歌山県立日高高等学校

校長 池田 尚弘

本校は、平成28年度、文部科学省スーパーグローバルハイスクール：SGHの指定を受け活動を開始し、本年度3年目を迎えました。

本校のSGH活動の特徴は、「翔べ 日高から 世界へ ～地方を創生するグローバルリーダーの育成～」を研究開発の軸に据え、「地方創生」をキーワードとして、地方に包含する様々な課題、想定外の課題や未知の課題に対し、グローバルな視点から多角的かつ多面的に課題解決を探ろうとする能力を育成することを目的としています。具体的には、課題解決型学習（PBL：Project-Based Learning）の手法をもとに、SG課題研究Ⅰで、生徒全員が「地域文化」「地域産業」「移民の歴史」「地域防災」の基礎学修を行った上で、SG課題研究Ⅱで自らのテーマを設定、主体的に研究し、中間発表会を経ながら、成果発表会につなげます。この間に自ら渉外を行ったり、発表方法を工夫し、逆に質問を受けたりしながら学びを深め、コミュニケーション力や表現力を磨きます。加えて、地域の移民の歴史と文化の研究を確かなものとするカナダ研修、将来発災が危惧される南海トラフ地震による津波に備え、防災や避難所運営等で課題を共有するインドネシア研修、地域の企業や自治体が現地で取り組む産業や文化交流を調査するベトナム研修と、それぞれのテーマに沿った3カ国をフィールドに調査活動を行います。訪問先では、現地の高校生や、企業、地域の方々との交流やインタビューを通して、日高地方の文化や産業、取組を紹介しながら、それぞれの課題や価値について学びを深めました。SGH指定3年目に入り、SG課題研究Ⅲで、自ら調査し学修した研究を論文にまとめ、地域に発信、地域もそれに応えてくれる部分が出てくるなど、本校の活動が地域に浸透しつつあると感じています。3年間を終え、様々な活動に刺激を受け、主体的、積極的に課題に取り組む生徒が多く見られるようになり、研究開発の確かな手応えを感じています。

本年度の特筆すべき活動は、「世界津波の日」2018高校生サミット in 和歌山に関わる活動です。サミットの分科会では、SGH課題研究Ⅱで取り組んだ研究成果「Raising Awareness of Disaster prevention ～Let's make our Networks～」を発表するだけでなく、チェアマンとして主体的に分科会を運営、諸外国から参加した生徒の意見をまとめました。また、全体会では総合司会並びに議長を本校生徒が務め、48カ国の参加生徒を代表して大会宣言を行うなど、サミットをリードする活躍を行いました。サミットに先駆けて実施されたスタディツアーでは、24カ国、124名の生徒を本校で受け入れ、附属中学校を含むすべてのHR教室で生徒交流及び防災訓練や避難所運営ゲーム（HUG）など、防災学習を行いました。このことは、地域に生活する日本語が話せない方たちに対して、非常時における効果的なコミュニケーションを図る訓練にもなり、地域課題の解決に本校生徒が関わられることを示しました。

最後になりましたが、本校のSGH活動を支えていただいた、文部科学省、県教育委員会、多くのご支援とご指導をいただいた、SGH運営指導委員会、大学、関係機関や地元企業の皆様方に心より感謝申し上げます。特に海外訪問に際し、ベトナム大使館、JICA、ERIAの皆様方には心温まる対応をしていただき、誠にありがとうございました。

目 次

研究開発完了報告書	1
I S G 課題研究 I・II・III (総合的な学習の時間/課題研究)	
1 学年	9
2 学年	22
3 学年	34
II 海外研修	
1 インドネシア研修	37
2 カナダ研修	43
3 ベトナム研修	48
III 調査分析	
1 S G H アンケート調査	53
2 海外研修 事前事後アンケート	56
3 「各科目に関するアンケート」アクティブラーニング集計	58
4 GTEC for STUDENTS の受験結果	59
IV 交流活動	
1 姉妹校交流	
(1) 中国	62
(2) デンマーク	65
2 海外研修受入	67
3 アジア・オセアニア高校生フォーラム	69
4 「世界津波の日」2018 高校生サミット in 和歌山	
(1) 全体会	70
(2) スタディツアー	74
V 資料	
運営指導委員会の記録	80
教育課程表	81
生徒プレゼンテーション資料	83
生徒ポスター資料	87
3 年次 (平成 30 年度) 取組概要ポスター	88
S G H 通信	89

(別紙様式3)

平成31年3月29日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 和歌山県和歌山市小松原通り一丁目1番地
管理機関名 和歌山県教育委員会
代表者名 宮下 和己 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成30年4月2日（契約締結日）～平成31年3月29日

2 指定校名

学校名 和歌山県立日高高等学校

学校長名 池田尚弘

3 研究開発名

翔べ 日高から 世界へ ～地方を創生するグローバルリーダーの育成～

4 研究開発概要

本研究開発では、過疎化や少子高齢化、経済の減退という深刻な地方の課題を解決する意欲と能力を持ったグローバルリーダーの育成を目指す。「総合的な学習の時間」、「課題研究」に「SG 課題研究」を設定し、課題解決学習と国内外の高校生との交流や研究を中心に据えた協働学習を展開する。2年次「SG 課題研究Ⅱ」を1単位増の2単位とし、フィールドワークなど探究学修に取り組みやすい環境を整備するとともに、本事業を全校的な取組とすべく、対象を普通科のみから総合科学科にまで拡大する。その中でグローバルな視野を持ったリーダーの育成に向け、地元企業や大学、JICA 関西、OECD、ERIA 等の関係機関の支援の下、国際的なワークショップやフォーラムに参加する機会を設け、グローバル化に対応する資質や能力を育成する。また、国内外の高校生とのワークショップやフォーラムを通じ、コミュニケーションやプレゼンテーションの能力を高め、協働して課題を解決していこうとする資質を育成するための探究学修を実施する。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
S G H事業推進のための教職員の加配	→											
P B L型授業や研修への支援	→											
アジア・オセアニア高校生フォーラムに係る支援	→											
「世界津波の日」2018高校生サミット in 和歌山に係る支援	→											
関係各機関との調整	→											
S G H運営指導委員会					→							→

(2) 実績の説明

- ・ S G H事業推進のための教職員の加配
S G H事業推進のための教員加配を行った。
- ・ P B L型授業や研修への支援
成果発表会、S G H全国高校生フォーラム等、生徒の探究学修や交流学习への支援を行った。
- ・ アジア・オセアニア高校生フォーラムに係る支援
県内外、国外からの参加者との連絡調整、フォーラム運営に係る生徒への指導、支援等を行い、グローバルリーダー育成への支援を行った。
- ・ 「世界津波の日」2018 高校生サミット in 和歌山に係る支援
サミット及び同関連行事のスタディーツアーにおいて、学校を支援した。また、和歌山県高等学校生徒科学研究発表会において、サミットに向けて研究した成果を、改めて発表する機会を設けた。
- ・ 関係各機関との調整
文部科学省等関係機関への問い合わせや相談をはじめ、さまざまな折衝や調整を行った。さらに、同校S G H生徒研究発表会について、教育委員会を通じてすべての県立学校に周知するなど広報に努めた。
- ・ S G H運営指導委員会
開催回数：年2回開催（平成30年度は8月と3月に実施した。）
内 容：事業説明、公開授業、今後の計画への助言等

運営指導委員は以下のとおり

京都大学 防災研究所 教授 牧 紀男 氏
日越関西友好協会 理事長 築野 元則 氏

(株)和歌山放送 代表取締役社長 中村 栄三 氏
和歌山市民図書館 中谷 智樹 氏

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① 地域探究プログラムの開発	→											
② 大学・関係機関との協働							→					→
③ 地方創生グローバルサミット	→											
④ 校内体制の充実	→											
⑤ 成果の普及					→	→						→
⑥ 運営指導委員会の開催				→								→

(2) 実績の説明

①地域探究プログラムの開発

地域探究プログラムとして地域文化学修、地域産業学修、移民の歴史学修、地域防災学修の4テーマを設定した。地域探究プログラムは、「SG 課題研究」において実施した。1年次「SG 課題研究Ⅰ」は「総合的な学習の時間」に導入し、1クラス(40名)単位で授業を展開、1年間で全4テーマについて学修しながら、2年次の探究学修で必要とされる「発信力」、「情報の収集や処理の手法」、「アンケート調査の手法」、「プレゼンテーションの手法」等のスキルを学修した。普通科5クラスの指導は、各クラス1名ずつ、計5名の教員が担当した。総合科学科1クラスについては、2名の教員が担当した。

2年次の探究学修「SG 課題研究Ⅱ」は、2単位として普通科においては「総合的な学習の時間」に、総合科学科においては「課題研究」の時間に導入した。学修テーマは、上記4テーマから1つを生徒自身が選択し、1年間継続的に探究学修を行った。普通科は4クラスを2クラス(80名)ごとに指導者8名で展開し、テーマごとに5名程度のグループで探究活動を行った。指導者1名あたり2グループ(10名程度)を担当した。総合科学科は2クラス(80名)の展開で指導者10名を配置、テーマごとに8名程度のグループで探究活動を行った。普通科「総合的な学習の時間」と総合科学科「課題研究」に計24名の教員が指導に当たった。

3年次「SG 課題研究Ⅲ」では、2年次に取り組んだ探究学修のまとめとして、論文の作成に取り組んだ。授業はクラス単位で展開し、各担任がその指導に当たった。

②大学・関係機関との協働

a 大学連携

(a) 和歌山大学

教育学部此松昌彦教授・岩野清美准教授、地域活性化総合センター岸上光克教授、観光学部東悦子教授に「SG 課題研究」に係る指導を依頼し、10月に開催した「SG 課題研究」の中間発表会と3月に開催した成果発表会に出席していただき、講評及び指導助言をいただいた。

(b) 近畿大学

国際学部矢澤知行教授に「SG 課題研究」に係る指導を依頼した。10月に実施した「SG 課題研究」の中間発表会と3月に開催した成果発表会に出席していただき、講評と指導助言をいただいた。

(c) 関西学院大学

10月に1学年普通科(200名)を対象に実施した。関西学院大学ではグローバル人材としてこれからの世界を生きるうえで重要な資質について講義を受け、理解を深めた。また、海外の国際機関での活動について、実際に体験した学生から具体的な話を聞き、グローバルな活動についての認識を深めた。

b JICA 研修

10月に1学年普通科(200名)を対象に実施した。JICA 関西を訪問し、日本の海外途上国支援事業の現状について、担当職員から説明をきいた。さらに海外支援ボランティア活動体験談を通して世界の国々の実状について学び、海外支援の意義や自分たちの可能性について、生徒それぞれが考え、学ぶことができた。

③地方創生グローバルサミット

a 国内研修

(a) アジア・オセアニア高校生フォーラム

7月24日～27日に開催された和歌山県主催の「アジア・オセアニア高校生フォーラム」に2年生3名が参加した。5分科会のうちの一つ「津波」の分科会において発表を行った。近い将来予想される南海トラフ大地震とそれに伴う災害が発生した場合、本校が避難所として指定されているため、避難所の運営において、高校生が果たす役割について発表した。

また全体会では司会を務め、閉会式では、大会宣言をカンボジアの高校生と英語で行うなど、全体会の進行にも積極的に関わった。

(b) 「世界津波の日」2018高校生サミット in 和歌山

10月31日～11月1日に開催された「『世界津波の日』2018高校生サミット in 和歌山」に3年生1名、2年生4名、計5名の生徒が参加した。3年生の1名については、高校生議長を務め、サミット進行の中心的役割を果たした。また、2年生の1名は総合司会を担当し、3名は、分科会において、本校で例年実施している「地域合同避難訓練」と「防災スクール」の取組を振り返り、その課題解決と地域住民の防災意識の向上のための提言を行った。

b 地方創生イノベーションスクール2030

2018年8月より第2期(ISN2.0)が始まり、本校は「実践校」として参画している。第

1期(ISN1.0)の3年間で積み重ねた実践と研究をふまえ、1、2年生約30名の研究グループが地方創生に向けた地域の魅力発見と発信、地域課題及びその解決の方策探究に取り組んでいる。

c 海外研修

今年度は、昨年度に引き続き、海外の研修先としてカナダ、インドネシア、ベトナムの3か国の訪問を計画、実施した。

(a) カナダ研修

探究学修(SG課題研究)のテーマの一つである「移民の歴史学修」の一環として、11月4日～9日の日程で実施(参加者8名)。バンクーバー市及びリッチモンド市において研修を行った。日系移民が従事した缶詰工場史跡訪問や現地県人会の方からの移民についての聞き取り調査を行い、当地方からかつてカナダに渡った先人が、鮭漁やその加工に携わり、生活の基盤を築く過程を詳細に学ぶことができた。

また、リッチモンド市ではリッチモンド・セカンダリースクールを訪問し、SG課題研究Ⅱで取り組んでいる「移民」についてのプレゼンテーションを行った。また、授業にも参加し、交流を図るなかで、現地の高校生の学習への姿勢、生き方から自分たちの可能性にも気づくことができた。

バンクーバー市内では、生徒が自分たちで移民をテーマとしたインタビューを行った。インタビューを通して現地の人々の考えを知るだけでなく、移民の受入と社会への定着の課題について学修することができた。

(b) インドネシア研修

探究学修(SG課題研究)のテーマの一つである「地域防災学修」の一環として、10月14日～20日の日程で実施(参加者7名)。JICAインドネシア事務所を訪問し、日本がJICAを通して行っている東アジア地域における国際協力と災害復興事業や現地の人々の防災意識向上の取組について学習した。

また、ERIA(東アジア・アセアン経済研究センター)では、自然災害が経済にもたらす影響や国を超えた協働による危機管理、復興に向けた取組について学習した。

また、2014年以来交流を続けているマダニヤ高校を訪問し、「防災」をテーマとする英語プレゼンテーションを相互に行った。本校は、非常食に関する調査について発表した。相互の災害に対する意識の違いを知るとともに防災への意識を高めることができた。授業交流や文化交流も体験し、異文化理解、異文化コミュニケーションについて視野を広げることができた。

(c) ベトナム研修

探究学修(SG課題研究)のテーマの一つである「地域産業学修」の一環として、1月14日～19日の日程で実施(参加者7名)。日本大使館、日本総領事館の訪問では、ベトナムと日本の関係や歴史、ベトナム国内の状況について知ることができた。また、JICA現地事務所の訪問では、支援態勢の変化について学んだ。相互利益につながる協力的な支援へと変化しているとのことであった。

高校との協働学修として、チャンフー高校を訪問し、研修テーマの「産業」について、農業に関するディスカッションを行った。ベトナムにおいても後継者不足、労働条件、収入について日本と同様の課題を抱えていること、その課題の解決のための方

策について意見を出し合った。また、課題研究で取り組んでいる農産物の産直店に関するプレゼンテーションを行い、農業の魅力化への取組を提案した。

日系企業の訪問では、現地の労働者の熱心な仕事を目の当たりにし、また、海外進出について話を聞いた。海外進出においては、政治の安定、災害のリスク分散、インフラ整備など、人件費以外にも様々な要因があることを知ることができた。

今回のベトナム研修では、ベトナム人観光客の誘致に取り組んでいる地元商工会からの支援協力を得ることができ、ベトナムをより深く学修できる企業、機関を紹介していただき、有意義な研修をすることができた。

④校内体制の充実

a 事業内容の研究

探究学修については、1年次、2年次、普通科、総合科学科の担当者会を毎月2回程度開催し、年間計画に検証と修正を加えながら前年度に増して効果的な探究学修となるよう取組を進めた。また、本校SGH事業全体の計画や研修内容については、事業推進担当分掌である教育開発部の定例部会（週1回）と必要に応じて開かれる臨時部会において検討を重ねてきた。

b 視察研修

本年度は探究学修の充実（教材開発・評価法）と海外研修の深化（現地校との協働学修）にむけた示唆を得るために2校を視察した。訪問先では、研究手法、発表方法、校外機関との連携など、本校の取組をさらに充実させる知見を得ることができた。

また、前年度の視察先の先進校とは、電子メール等による情報交換を続け、事業の充実発展に向け取り組んでいる。

⑤成果の普及

a 研究発表会の開催

(a) 中間発表会

10月に2学年「SG課題研究Ⅱ」の中間発表会を開催した。地域文化学修、地域産業学修、移民の歴史学修、地域防災学修の4テーマごとに各グループがプレゼンテーションを行い、それぞれの探究学修の進捗状況や課題について発表を行った。テーマごとに和歌山大学と近畿大学の先生に講評と助言をしていただいた。

(b) 成果発表会

3月6日、7日の2日間にわたり、2学年「SG課題研究Ⅱ」の探究学修のまとめとして成果発表会を開催した。第1日目は午前中に分科会形式でテーマ別発表会を実施、最優秀グループを選出した。発表後、和歌山大学と近畿大学の先生からそれぞれのテーマごとに講評と助言をしていただいた。第2日目は午後に全体会を開催し、各テーマで選出された代表グループが全校生徒の前で代表発表を行った。

b 2018年度SGH全国高校生フォーラム

12月15日(土)に文部科学省・筑波大学主催により東京国際フォーラムを会場に開催された「SGH全国高校生フォーラム2018」に参加。SG課題研究Ⅱで作成した避難所運

営ゲーム英語版を「『世界津波の日』2018 高校生サミット in 和歌山」に参加した海外高校生や地域住民と共に「防災スクール」で実際に使用した取組からの学修成果をポスターにまとめて発表した。

c SGH甲子園2019

3月23日(土)に関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスで開催された「SGH 甲子園2019」に参加。研究成果ポスタープレゼンテーション部門で「防災カレンダー開発」に取り組む2年生2名が発表した。また、ラウンドテーブル型ディスカッション部門のテーマ1「日本が女性の社会進出を進めるに当たっての課題と解決策」に出場した。

d 成果の普及・発信

SG 課題研究の研究内容や国内外の研修の研修内容、成果について校内での共有と校外への普及を図るため、「SGH 通信」を発行した。加えて、本校のHPからも閲覧可能にすることにより、SGH の取組と成果の普及に努めている。

また、国内外の研修報告については随時地元新聞を通じて積極的に発信に努めた。また、中学3年生および保護者対象の学校説明会において、本校のSGH事業の取組や研修内容について説明を行った。

年度末の成果報告会については、管理機関（和歌山県教育委員会）等を通じて、県内の全高等学校へ案内を発送し、探究学修の成果の普及と共有を図った。

⑥運営指導委員会の開催

運営指導委員会は8月と3月の2回開催した。第1回目の運営指導委員会では、事業の目的や内容、研究テーマの設定理由、海外研修先の選定理由等を説明し、事業の進捗状況、生徒の様子などを報告した。出席者からは、本校のSGH事業に対する期待、海外派遣国内の新たな研修先の提案など建設的な意見、助言をいただいた。

第2回目の運営指導委員会では、今年度一年間の取組状況と課題、来年度の計画について説明した。

7 目標の進捗状況、成果、評価

指定を受けて以来実施しているアンケート調査のうち、各種研修後に実施している記述アンケートや振り返りシートについて、本年度改善を加えた。「学び」を回答しやすい設問に変えることで生徒が自らの「学び」を明確化することを企図したためである。同時に、指導者が生徒の「学び」や変容（成長）を把握しやすくするねらいも含めた。その結果を検討し、探究学修の内容や進度、計画の調整を行うことができた。

定期的実施するアンケート結果の推移から、地元企業への理解が深まり、将来的には地元で生活し貢献したいと考える生徒が徐々に増加していることが見て取れる。このことは、SGH事業の中心的な取組である地域探究プログラムで地元地域の課題をテーマとして取り組むことにより、地域社会に対する関心や理解が高まり、いまままで気づかなかった魅力や可能性を見出している成果と考えることができる。さらに2年次において探究学修を1単位増加させ連続2時間としていることで、地域のフィールドワークに取り組む機会が増えたことも、その一要因として考えられる。また、グループ活動を通

じて、「協働力」「マネジメント力」が向上し、グループ活動がスムーズに進められるようになった。成果発表会に向けた取組の中では、他グループよりもすぐれた発表を意識することにより、「やる気力」も高められた。

海外研修に関しては、事前・事後アンケート調査より、参加者の9割が、海外の高校生との協働学修を通して、「コミュニケーション力」や「発信力」を向上させる必要性を認識したことがわかる。また、様々なことに挑戦して自己を成長させるという意欲も高まっている。このことは、GTECの結果分析からもうかがえる。

さらに、年1回2学期末に実施している授業アンケートの結果について、SGH指定前の平成27年度と本年度を比較してみると、アクティブラーニングに関する項目の評価がほとんどの教科で高くなっている。探究学修（「総合的な学習の時間」や総合科学科2年次の「課題研究」）においては、もとより高い評価を得ていたが、他の9教科の評価が向上し、差が縮小している。項目によっては、探究学修よりも他の9教科の方が高い数値を示している項目もあることから、アクティブラーニングが他教科の授業にも波及し、全校的な取組として定着してきていることを示している。要因として探究学修を一部の教員が担当するのではなく、本校所属の半数の教員が担当していることがあげられる。

また、成果普及、情報共有のための取組として昨年度末に通信の発行を目標として掲げたが、今年度25号まで発行し、HP上にも掲載し、当初の計画を達成できたと考えている。

8 次年度以降の課題及び改善点

昨年度より2年次の「総合的な学習の時間」及び「課題研究」を1単位から連続2時間展開の2単位としたことにより探究学修の内容が深まり、ローカルな視点や活動は確実に広がり、深化している。一方で、グローバルな視点や活動については、十分とは言えない部分もある。探究学修の内容や手法の研究を重ね、並行して海外研修における現地高校生との協働学修の内容にも検討を加える必要がある。

また、今年度、3年次の探究学修において、2年次までの研究のまとめとして英語論文作成に取り組んだ。しかし、英文要約を作成する段階までは、全員が取り組めたが、英語での論文の完成は一部にとどまり、全員に完成させるところまでは到達できなかった。次年度は、英語論文を増やして、グローバルに意見を発信し、提言を行いたいと考えている。

さらに、成果の普及のための取組として、今年度に引き続きHPのさらなる充実とSGH通信の発行を通じて成果の普及に努めるとともに探究学修の深化を目指しながら、2年後のSGH事業指定終了後を視野に入れ、各事業計画・内容を検討し、継続事業の絞り込みに取りかかりたい。

【担当者】

担当課	県立学校教育課	TEL	073-441-3681
氏名	岸本 高幸	FAX	073-441-3652
職名	指導主事	e-mail	kishimoto_t0004@pref.wakayama.lg.jp

I SG 課題研究 I・II・III（総合的な学習の時間/課題研究）

1 学年 SG 課題研究 I（総合的な学習の時間）

SG 課題研究 I は 1 単位、クラス単位で実施している。

1 全体の流れ

学習のねらい（目標とするスキル）		
	普通科	総合科学科
	(ア) 発信力 (イ) 情報の収集や処理の手法 (ウ) アンケート調査の手法 (エ) プレゼンテーションの手法	(ア) 情報処理と情報発信スキルの獲得 (イ) 原理探究の姿勢の向上 (ウ) 論理性の向上 (エ) 科学的社会的視野の拡大
実施内容		
月	学習項目（学習時間：全 35 時間）	
	普通科	総合科学科
4 月	1. オリエンテーション (1) 2. 地域文化 (7)	1. オリエンテーション (1)
5 月		2. 論文から学ぶ (2)
6 月		3. 京都大学瀬戸臨海実験所研修 (6)
7 月	3. 地域産業 (8)	4. サイエンスフェスタ (10)
8 月		
9 月		
10 月	4. 地域防災 (8)	5. ディベート (12)
11 月		
12 月		
1 月	5. 移民難民 (8)	
2 月		
3 月	6. 成果発表会 (3)	6. 課題研究 II に向けて (4)

生徒の学び（年間取組全体を通して）

- ・総合的な学習の時間は、他の授業で学ばないこと、また、習っている同じようなことでも深く掘り下げて学習することができたため、興味が出て、関心が高くなった。調べていくと知っているつもりだったことが、意外と知らないことが次から次へと出てくるので面白い経験ができた。
- ・今までは同じグループの人が意見を言って、それに賛成していただけだったが、総合的な学習の時間では、話し合いを重ねるにつれて、コミュニケーション能力がついて積極的に意見を言えるようになってきた。これから人と話す機会も増えてくるので、いい練習になった。

2 学科の特性と学習活動

【普通科】

総合的な学習の時間

(1) ねらい

本校が設定する地域課題全 4 テーマを一年間で学習しながら、2 年次の探究活動で必要となるスキルを学習する。

(2) 内容と方法

4 テーマを 4 単元として、スキル学習に重点をおいた授業を行う。

第 1 単元「地域文化」——目標とするスキル：発信力

第 2 単元「地域産業」——目標とするスキル：情報の収集や処理の方法

第 3 単元「地域防災」——目標とするスキル：アンケート調査の手法

第 4 単元「移民難民」——目標とするスキル：プレゼンテーションの方法

・学習活動

第1単元	地域文化			
目標とするスキル	発信力を身につける。			
月	時間	学習内容	形態	生徒の活動
4月	1	科目の理解 発信力を学ぶ	個人 ペア	年間を通じた学習内容を理解する。 伝達ワークを通して発信力を学ぶ。
	2	発信実践	ペア	居住地域の身近な文化素材を広報する。
5月	3	発表準備 (1)	個人	メディアを活用して資料を収集し、伝える内容を決定する。
	4	発表準備 (2)	個人	発表実践に向けて視覚資料をデザインしまとめる。
	5	発表実践 (1)	班	班内で発表する。 ・傾聴姿勢、質問精選、振り返り
6月	6	発表実践 (2) -1	全体	クラス内で発表する。 ・傾聴姿勢、質問精選、振り返り
	7	発表実践 (2) -2 まとめ	全体	発信力についての学びを今後どう生かすか、考察しまとめる。

生徒の学び

- ・自分達の住んでいる市町村の有名な文化財（御坊市－御坊祭り）、（日高川町－道成寺）、（美浜町－煙樹ヶ浜）等に関しては熟知していたが、日高地方のほかの文化財についてはほとんど知らず、こんなにあるものかと改めて認識できた。
- ・紀州鉄道について自分で調べ、自分で撮った写真も使ってみんなの前で発表した。自分が調べたことや自分の意見を発表することができた。自分は、紀州鉄道をもっともっと有名にしたいと思っている。

第2 単元	地域産業			
目標とする スキル	数値データを表やグラフを用いてまとめる。 表やグラフを見やすく表現する。数値データを分析する。			
月	時間	学習内容	形態	生徒の活動
7月	1	データの統計処理	個人	数値データを表やグラフを用いてまとめる。
	2	データの統計処理	個人	度数分布表を作成する。 表のレイアウトを見やすく整える。
	3	グラフの活用方法	個人	グラフの種類を知り、目的にあったグラフを作成する。
	4	課題設定	班	地域産業についてグループテーマを設定する。
9月	5	情報収集・分析	個人	国勢調査のデータを利用し地域産業に関するものを表にする。表からグラフを作成する。
	6	分析結果の考察 今後の課題	班	表やグラフからわかったこととわからなかったことをまとめる。今後の課題及び改善点を考える。
	7,8	クラス内発表 相互評価	全体	クラス内発表を行い、相互評価を行う。

生徒の学び

- ・パソコンが苦手な文字を打つくらいしかできなかったけれど、インターネットなどで集めた情報をグラフにすることができるようになって嬉しくなった。
- ・和歌山県の産業について、数多い情報の中から、正確で信用できるものを選びだし、整理できるようになった。取り組んでいくうちに情報処理が早くできるようになった。
- ・日高町の特産のクエについて調べた時、思ったより情報が少なくて焦ったが、なんとか情報をかき集めて、発表まで持っていくことができた。やはり、与えられた情報から何を考えて、何をやるのかということがとても大切だと思う。得た情報を最大限に利用できる能力があれば、いろいろな場面で有利に働くと思うので、これからの授業でもその力を身につけるために頑張りたい。
- ・和歌山の農業や漁業について調べてまとめるというグループワークで、資料検索、グラフ作成、プレゼン資料作成、発表原稿の作成を行った。複数の資料の中から、信憑性の高い項目を書き出し、グラフ案を考えると同時に、その問題点、解決策を考えた。これらの作業の中で、みんなで話し合っ、まとめていく力、わかりやすい文章にまとめていく力があった。

第3 単元	防災			
目標とする スキル	防災を自分事と捉える。アンケート調査の手法を学ぶ。			
月	時間	学習内容	形態	生徒の活動
10月	1	防災知識を得る 自分事と捉える (1)	個人 班	自助・共助・公助について知る。 ワークシートを用いて災害状況をイメージ し、共有する。
	2	自分事と捉える (2)	班	避難所運営シミュレーションを通して避難 所としての日高高校及び日高高校生の役割 を考える。
11月	3	自分事と捉える (3)	班 全体	避難所運営シミュレーション(2回目)に取り 組み2回分の分析や気づきをクラスで共有 する。
	4	防災アンケート (1) 質問紙調査の基礎	班 個人	アンケート作成の手法を学び、防災アンケ ートの項目を考える。
12月	5	防災アンケート (2) 作成と実施	班 全体	アンケート用紙を作成し、クラス内アンケ ートを実施する。
	6	防災アンケート (3) 集計と分析	班 個人	調査結果を集計し、発表用ポスターとして 可視化する。分析し、傾向や特徴をまとめ て、予想と結果の違いを知る。
	7,8	防災アンケート (4) 共有と総括	班 全体	班単位またはクラス全体で発表を行い、相 互評価する。

生徒の学び

- ・ 防災の避難所のシミュレーションでは、「私だったらこの人（もの）はここに配置するかなと思っていても、他の班員は私が思っていることと違ったりしたので、「なるほど、それもありがたな。」と思え、他の人の意見を聞くことによって、自分の考えを深めることができました。
- ・ 防災アンケートを自分で考えて作り、みんなに回答してもらうことで、みんなの防災への取り組みを知ることができました。アンケートの結果を自分でわかりやすく工夫し、まとめるという作業はたいへんでしたが、図やグラフにすることでより深くテーマについて分析できたのでよかったですと思いました。私はこの取り組みを通して防災に関する知識や関心が高まったと思います。
- ・ 今まで防災についてはたくさん学んできたが、班で避難所の設営、運営を考えたり、実際に自分でアンケートを作り、調査をしたりしたのは初めてだった。これらの活動は、将来に起こる南海大地震の際にも生かせる知識となったと感じて、初めての学んだことはとても大切だと思った。
- ・ 休日の部活をしていたら、本当に緊急地震速報が聞こえてきて、同じ教室にいた生徒と協力してスムーズに校庭に逃げることができた。授業で災害状況イメージトレーニングをしていたので、本当に地震が来た時に慌てずに対処できた。

第4単元		移民の歴史・難民問題		
目標とするスキル		国内や海外の文献の検索方法を学ぶ。 問題点、課題の抽出方法を学ぶ。 集めた資料をまとめ、プレゼンテーションを行う上でのスキルを習得する。		
月	時間	学習内容	形態	生徒の活動
1月	1	現状を知る	個人	映像視聴と語句調べを通して移民問題や難民問題の現状を知る。
	2	課題設定	班全体	移民の歴史または難民問題のうち、どちらか一つを生徒が選び、班を構成する。班のメンバーで調べたいことを付箋に書き、用紙に貼ったうえで、共通項目や比較項目を探り、テーマを決定する。決定テーマをプレゼンし、全体で共有する。
2月	3	資料収集 (1) 文献検索の方法	班	メディアを活用し、資料収集作業に取り組む。引用、文献検索の方法を学ぶ。
	4	資料収集 (2)	班	メディアを活用し、資料収集作業に取り組む。集めた資料から、分かることや問題点、課題の解決方法を考える。
	5	プレゼン資料の作成 (1)	班	パワーポイントを作成する。レイアウトを工夫して、伝えたいことが効果的に伝わるかどうか検証する。
	6	プレゼン資料の作成 (2)	班	パワーポイントを仕上げる。発表用原稿を作成し、発表練習を行う。
	7,8	プレゼン発表 相互評価	班全体	各班でプレゼン発表を行い、相互評価する。

生徒の学び

- ・以前は移民や難民は迷惑で悪いものだと思っていたけれど、調べ学習をすることによってその偏見がなくなり、世界にはこんなにも困っている人がたくさんいることが理解できた。
- ・知りたいこと（ゴール）を考え、見据え、仮説を作り、その仮説をもとにグループのみんなで、仮説に潜む可能性を出し合うことができた。難民問題に関しては、実際に接したことがないので、いろいろなデータを収集して、仮説を作るのが難しかった。
- ・移民や難民について調べていくにつれて、難民が増える理由、それを止めるための解決法などがよくわかってきた。でも一人ではどうにもならないこともよくわかってきて、一朝一夕では解決できないことがあることも理解できた。
- ・難民や移民問題は、日本とあまり関係のない問題だと思っていたが、国際社会のなかで、日本が果たさなければならない大切な問題であることが理解できた。これから日本がどうしていくべきなのか自分なりに考えることができた。
- ・美浜町のアメリカ村と呼ばれている地区から大勢カナダにわたっていることはあまり知らなかった。昔に船でカナダまで渡った勇気はたいしたものだった。
- ・外国から御坊にも働きに来ている人がいるが、彼らのことももっと知る必要があると思った。

(3) 3年間の成果と4年次に向けての課題

①生徒自己評価

年間を通しての単元別スキル習得に関して、生徒は5段階で自己評価を行った。結果は以下の通りである。

単元・スキル	自己評価平均
「地域文化」——目標スキル：発信力	3.4
「地域産業」——目標スキル：情報の収集や処理の方法	3.3
「地域防災」——目標スキル：アンケート調査の手法	3.8
「移民難民」——目標スキル：プレゼンテーションの方法	3.4

- 5：十分にスキル習得ができ満足のいく学びができた
 4：おおむねスキル習得ができ、おおむね満足のいく学びができた
 3：基本的なスキル習得ができ、まずまず満足のいく学びができた
 2：あまりスキル習得ができず、やや不満足な学びであった
 1：ほとんどスキル習得ができず、不満足な学びであった

アンケートの調査の手法が一番高い評価を得た。これは、アンケートの質問項目から始めて、クラス全員を回答者にし、その結果を集計して分析するという完結した学びの経験が生徒に達成感を与えることができたことが大きいと思われる。逆に評価の低かった情報の収集や処理の方法では、エクセルのピポットテーブルなど生徒にとってはかなり難解なスキルが組み入れられており、達成感を感じられなかった生徒が他の単元に比べて多かったことが大きな要因であると考えられる。生徒の自己評価の結果より、それぞれの単元の興味付けや難易度を考慮し、うまく組み入れることが重要であると考えられる。

②成果

これまでの3年間の取組での学習例も生徒間で後輩に引き継がれ、また、総合学習の時間を担当する教員の数も増えた。年々校内的に共通理解が深まる好ましい傾向にあり、2年時でさらに学習を深める「SG 課題研究」の基礎固めとして定着し成果を上げてきている。共通理解の深まりとともに、4つの単元ごとの生徒の学びの長所、短所を検討できる機会が増えてきたので、各担当教員で生徒の学習状況を考慮しながら柔軟に修正できるようになってきた。

③課題

「SG 課題研究 I・II」の関連性が高まり、2年次の学習の基礎固めとして大きな役割を果たしているが、「総合的な学習の時間」以外の「情報」を始め他教科との連携をさらに深めていく必要がある。また、評価方法についても、より深いルーブリックの項目設定やより客観性の高い生徒の自己評価、指導者の評価方法の開発・導入に今後も継続して努めていく必要がある。

(4) 校外研修——JICA 関西・関西学院大学研修

①目的

SGU として様々な取組を行っている関西学院大学（西宮市）、青年海外協力隊の派遣や ODA などの国際協力の拠点となっている JICA 関西の事務所（神戸市）を訪問し、グローバル人材についての理解を深める。

関西学院大学ではグローバル人材に必要な資質について大学教授より講義を受け、国際機関でいろいろな活動をサポートしている大学生の体験を聞く。さらに大学の関連施設を見学して理解を深める。

JICA 関西では、JICA 活動の概要や派遣隊員の体験談を聞いたり、また実際に JICA 関西の施設を見学したりして国際協力について理解を深める。

②実施時期、対象

2018 年（平成 30 年）年 10 月 2 日（火） 普通科 1 学年 200 名（普通科 5 クラス）

③研修内容

a 事前学習

JICA(Japan International Cooperation Agency)、青年海外協力隊、ODA(Official Development Assistance)、また、実際に青年海外協力隊の活動報告をしてくれる国（ベトナム・インドネシア）、そして関西学院大学の基本情報を担当教員が作成したレジメをもとに HR で事前学習を行うとともに関西学院大学の担当教授からの与えられた課題「将来の自分の夢とその理由」、「大学生活について関学生に聞きたいこと」のレポート作成を行う。

b 校外研修

研修内容より、効率的な学びができるよう 5 クラスを A 班（1、2、3 組）と B 班（4、5 組）の 2 班に分け、実施した。

時刻	A 班				B 班	
	1 組	2 組男子	2 組女子	3 組	4 組	5 組
10:25	バス到着					
10:30	JICA 概要講義		JICA 施設見学		大学構内移動	
10:40					講義 山田好一教授	
11:00	JICA 施設見学		JICA 概要講義		大学生とディスカッション	
11:20						
11:30	体験談 吉田悦子氏（ベトナム）				昼食（学生食堂試食）	
11:50						
12:30	昼食（各自用意）講堂				大学施設見学	
13:00	バスでそれぞれ午後後の会場に移動					
14:00	講義 山田好一教授				JICA 概要	JICA 施設
14:30	大学生とディスカッション				JICA 施設	JICA 概要
15:00	休憩				体験談柳沢紗也子氏	
15:10	大学施設見学				（インドネシア）	
18:00	バス帰着					

④生徒の学び

- ・ 関西学院大学の山田教授に、グローバル人材について話をしていただいた。昔のヨーロッパ諸国の植民地開拓時代は、相手を服従させることがグローバル化の基準だったということで、今の私たちのグローバルの基準と大きく異なっていることがわかりました。本当のグローバル化とはどういうことなのか、いろいろなお話の中で、もっと考えなければならない問題だと思いました。
- ・ 国際協力とは一方的に支援することではなく、互いが協力し合っていくものだということ学んだ。また、自分が 20%しかいない、先進国に生まれた恵まれた人間であるということ学んだ。JICA を訪れたことで、今まであまり身近に感じていなかった途上国のことがより身近に感じられた。自分の生活がそういう多くの国々により支えられているのだとわかり、とても勉強になった。

⑤成果

国際機関や大学が少ない和歌山県において、実際にグローバルを間近に感じられる関西学院大学、JICA 関西への 1 年生の訪問は貴重な体験であった。地理や歴史の授業などで海外の基本的な知識の学びは深められるが、その国の人々の暮らしを理解し、その中で課題を見出し、その解決に向けて奮闘する具体的な姿を理解することはできない。実際に、JICA の青年海外協力隊の報告や関西学院大学の教授や学生の話聞き、質疑応答を深める中で参加した多くの生徒はグローバル時代に我々はどうな学びをしていくべきかという糸口をつかめたと思われる。今後 2 年次に向けて校内外の様々な学びへのモチベーションも高められた。

⑥課題

校外研修を効果的に活用するため、これまで関西学院大学と JICA 関西の 2 か所での研修を行ってきたが、双方をバスで移動するには約 1 時間かかる。また、往復のバス移動時間も 5 時間程度かかるので、実際の学びの時間がかなり制約される。JICA、関西学院大学とも、もう少し研修時間を深めて、学びを深めていくのも学習効果が期待できるかもしれない。今後は事前学習をさらに充実させて、1 日 2 か所の研修より、どちらか 1 か所を選択して、十分に時間を確保したうえで、より深い学びができるようなプログラムに見直しすることも考慮していきたい。



【総合科学科】

総合的な学習の時間

(1) ねらい

総合科学科 1 年生は、日高高校附属中学校から進学した生徒 1 クラス (39 名) からなり、一昨年まで実施していた SSH 事業の対象学年として、中学校でも探究的な学習スキルの習得を目指した学習を進めてきた生徒集団となる。

このような特性を生かし、次の 4 点を狙いとした。

- (ア) 情報処理と情報発信スキルの獲得
- (イ) 原理探究の姿勢の向上
- (ウ) 論理性の向上
- (エ) 科学的社会的視野の拡大

(2) 内容と方法

- 第 1 単元「論文から学ぶ」
- 第 2 単元「サイエンスフェスタ」
- 第 3 単元「ディベートプログラム」
- 第 4 単元「課題研究 II に向けて」
- 第 5 単元「校外研修」

第 1 単元	論文から学ぶ
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ WEB 検索の手法と注意点について学ぶ ・ データの処理や提示方法、考察の書き方などを学ぶ
学習内容	<p>中学時に行った「卒業研究」の内容に関連した文献を WEB 上で検索し、自分の研究内容が「専門的にはどのような位置づけとなっているのか」「考察を深めるとはどういうことか」などについて学んだ。また、参考とする文献の「客観性」が確保される条件について学び、WEB での情報検索の方法と危険性などについて理解を深めた。</p>

第 2 単元	サイエンスフェスタ
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小中学生対象の科学実験ショー「サイエンスフェスタ」を企画する ・ 必要な情報を集め、内容を決定し、予備実験を行う ・ フリップや PPT 資料など表現方法を探究し、わかりやすく伝える工夫をする ・ 小学校への広報活動を行い、文化的な広がりをめざす
学習内容	<p>各グループは、授業以外にも集まり、協議や実験などを繰り返した。また、グループ内には、広報担当者をつくり、自分の出身小学校を中心に作成したチラシを持って訪問した。</p> <p>当日は、広報活動の成果が現れ、昨年以上の数の小学生が来訪し、実験にも参加した。小学生の反応もよく、実演した生徒もやりがいを感じている様子であった。</p>

生徒の学び

- ・小学生に科学を伝えるためには難しい言葉を簡単な言葉に直す必要がありました。そのためには自分自身が深く理解しておく必要があることに気づきました。
- ・班員の仕事のかたよりがあったことが反省点です。個人で頑張るのではなく、団体に協力しないと良いものは作り上げることはできないと感じました。
- ・難しい言葉はパワーポイントのイラストを用いて分かりやすく伝えるようにした。
- ・テーマを決めるのに時間がかかりすぎてしまった。実験は失敗の繰り返しであると体感した。
- ・紙芝居で原理を説明したことで理解を深めてもらえたように感じた。
- ・参加型の発表にしたことで、小学生の子どもたちに喜んでもらえて嬉しかった。



第3単元	ディベートプログラム
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現代的な課題について、4つの論題を選定する ・ 8名程度のグループで、1つの論題について調査活動を行い、課題についての理解を深める ・ 論理的な展開ができるよう、立論などを作成する ・ グループ内で肯定否定に分かれディベートを行う ・ ジャッジシートなどを活用し、公正な判定が行えるよう追求する <p>生徒は、中学時代にも簡単なディベートを体験しているため、進め方などディベート自体の学習には時間を割かず、後に挙げる4つのテーマについての調査研究し、それをもとに立論などを作成することで、現代的な課題についての理解など、めざす力を習得することに主眼を置いた。さらに全体のねらいに加え、次の項目についても単元目標と定めた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 現代社会の課題について考える ・ 情報収集力と分析力を向上させる ・ 論理的思考力を高める ・ 構成力と表現力を磨く ・ 傾聴力(メモ力)を身につける

学習内容	<p>ディベートのテーマは以下の通り</p> <p>「安楽死を認めるべきである」</p> <p>「日本は移民を受け入れるべきである」</p> <p>「AI の普及を進めるべきである」</p> <p>「兵庫と京都、どちらが都会か」</p> <p>12 時間の授業を情報の収集と立論等の作成に充てた。8 名程度のグループを二分して、最初の 9 時間程度は「肯定派」「否定派」を決めずに、双方の立場から、課題について調査し、論点を整理した後、立場を決定し、残り 3 時間で立場を決めて、立論などを作成し、ディベートに臨んだ。</p> <p>テーマの中には 1 年生にとっては難しいものもあり、全貌をつかむことがなかなかできない生徒も当初はいたが、立論作成や議論の構築についてグループ内で議論する中で、次第に理解を深めていった。ジャッジの役割も重視し、ディベートが論理的に構成されているか、説得力のある表現になっているかなどを評価し判定に生かした。</p>
------	--

生徒の学び

生徒からは、「意見を言う力がついた」「質問を瞬時に考える良い機会となった」「論理的な考え方の練習になった」「テーマについて深く知ったので、ニュースの見方が変わった」「中学でのディベートでは何もできなかったが、今回は何とかして発言しようと積極性を出した」などの感想が寄せられた。

担当教員からは、「難しいテーマについてしっかり検討し、グループ間で協議を進めることができていた」「ジャッジに伝える工夫が見られた」などの評価を得た。先に挙げた 5 つの項目をかなりのレベルで達成できたといえる。

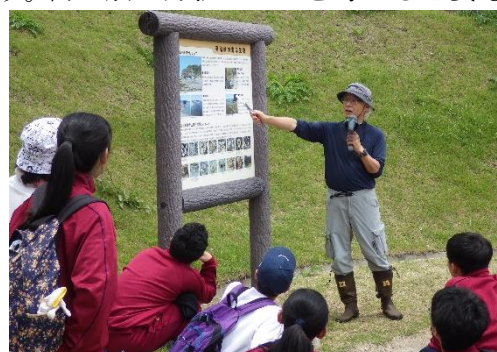


第4単元	課題研究Ⅱに向けて
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・和歌山県生徒科学研究発表会に参加する ・日高高校生徒研究発表会に参加する ・上記2つの発表会の内容から、次年度の研究内容について準備する
学習内容	ポスター発表を中心に行われる、SSH 指定校などの研究発表会に参加することにより、新たな知見を広げることができた。また、質疑応答の様子を見ることにより、コミュニケーション力の必要性についても認識を新たにすることができた。

第5単元	校外研修（京都大学瀬戸臨海実験所研修）
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の自然環境の豊かさに注目する ・生物分類についての知見を深める ・地域の特性を活かした情報発信について考える
学習内容	<p>京都大学瀬戸臨海実験所助教の大和茂之氏より、講義と大和氏が監修した南方熊楠記念館周辺の生物案内板の解説をうけ、自然を生かした観光資源のあり方を学習した。また、独自に作成した生物リストの冊子は自分が得意とする分野についてどのように情報発信するかについてのヒントとなった。</p> <p>海洋生物の採集と分類に関する実習を中心に実施し、黒潮の影響など紀伊水道の生物の特徴と系統的な生物の認識を深めた。</p> <p>体験した内容をもとに、和歌山県特有の自然環境を生かした地域振興について考察した。</p>

生徒の学び

- ・海に住む多様な生物をウリに、自然体験できる所を増やせば良いと思った。
- ・和歌山は自然豊かな環境なのだと改めて学んだ。豊かな環境を生かして熊野古道ツアーをしたらいいと思う。
- ・普段は気にとめないような生物を新たに知ることができた。和歌山がもつ環境をそのまま体験できたら、普段は気にとめないようなことを知ってもらえると思う。
- ・和歌山は自然にあふれていることが分かったが、県外から見ると和歌山は遠いイメージがあるので、直接見てもらうことは難しいと思う。何か別の方法でPRを考える必要もあると思った。



(3) 3年間の成果と4年次に向けての課題

・成果

①サイエンスフェスタ

集客方法に年ごとの変化があった。ポスターを配るだけの状態から、1枚ずつ配りに行くスタイルに変更したことで、参加者が増えた。集客が増えていることで、生徒は地域とつながる大切さや情報発信の大切さを感じている。

②ディベート

テーマ設定が明確なものとなってきている。近年、問題視されている移民や遺伝子組換えなどの社会問題や自然科学をテーマとすることで、自分たちの未来を創造する力を養える。また、テーマを自分たちの問題として捉えられることで、より議論が主体的で活発なものになっている。

③校外研修

2年生での課題研究のテーマ設定に関連が出てきている。例えば、今年度の2年生のテーマでは干潟の生き物や、地域に用水路が多いことに注目し、エネルギー資源を考えたテーマがあった。これは、地域の自然の豊かさや地域の特性を生かした情報発信といった校外研修の学習活動と合致している。

・課題

総合科学科の活動を普通科の生徒にいかに関係が深まるかが課題としてあげられる。2年生では学校全体の成果発表会を行っているので、1年生でも総合学習で行ってきた学習の振り返りを発表し、他のクラスや学年に共有する機会があれば、より有意義な活動となると考えられる。

2 学年 SG 課題研究 II (総合的な学習の時間/課題研究)

SG 課題研究 II は 2 単位 (授業は二時間連続) で実施している。生徒はテーマごとにグループ別で探究活動を行った。全体の流れは以下の通り。

1 全体の流れ

学習のねらい (目標とするスキル)			
(ア) 課題の発見・仮説の設定に関する能力の向上			
(イ) 調査・研究などの実行に関する能力の向上			
(ウ) 結果の分析に関する能力の向上			
(エ) 研究成果の発表に関する能力の向上			
実施内容			
月	学習項目 (学習時間: 全 70 時間)		学習活動
	普通科	総合科学科	
4 月	1. オリエンテーション (2)		<ul style="list-style-type: none"> 研究分野を決定する。 研究グループを決定する。(担当者決定)
5 月	2. 研究テーマの検討と決定 (8)		<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマを検討する。 テーマと仮説を設定する。 研究計画を策定する。
6 月	3. 研究活動 (43)	3. 研究活動 (44)	<ul style="list-style-type: none"> 研究計画に従い、研究を進める。 必要に応じて校外での調査活動を行う。
7 月			
8 月			
9 月			
10 月	4. 校外研修 (6) 5. 中間発表会 (3)		<ul style="list-style-type: none"> 研究機関や専門家を訪れ、知見を広める。 研究設定や進捗状況について校内で発表し、指導助言を得る。
11 月			
12 月		4. 和歌山県生徒科学研究発表会 (10)	<ul style="list-style-type: none"> 研究内容をまとめ、ポスター発表用資料を作成する。 研究発表会に参加し発表を行うほか、他校の生徒や専門家との意見交換を行う。
1 月			<ul style="list-style-type: none"> 研究発表会等で得られた意見を参考に研究を深める。
2 月			
3 月	6. 成果発表会 (6)	5. 校内課題研究発表会 (4)	<ul style="list-style-type: none"> (普) パワーポイント発表用の資料を作成し、校内で発表する。 (総) ポスター発表用の資料を再作成し、校内で発表する。
	7. 自己評価 (2)	6. 自己評価 (2)	<ul style="list-style-type: none"> ルーブリック等を用いて自己評価を行う。

2 学科の特性と学習活動

【普通科】

総合的な学習の時間

(1) ねらい

地域の現状と歴史、及びそこに存在する様々な課題について理解を深め、体験的な活動や課題解決的な学習を通して課題解決の方策を探究する。また、その学習を通して地方と世界のつながりにも目を向け、グローバルな視点を持ちながら、地域の発展に寄与しようとする態度を身につける。

(2) 内容と方法

本校が設定する地域課題 4 テーマから生徒が一つのテーマを選択し、課題を発見し、その課題を解決するための方法の探究を図る。生徒はクラスの枠組を超えて 5 人程度のグループを結成し、一年間の探究活動を進めた。

(3) 校外研修/地域フィールドワーク

各探究グループは、授業時間を活用して随時地域フィールドワーク (FW) を行う。それ以外に、遠方の専門機関や専門家を訪ねる、テーマ別「校外研修」を実施した。今年度の校外研修および地域フィールドワーク協力機関は以下の通り。

日 時： ・校外研修 2018 年 (平成 30 年) 9 月 14 日 (金) 終日
 ・地域フィールドワーク 授業日を中心に随時実施

内 容：

地域文化	校外研修	：和歌山県立博物館、和歌山県立図書館、イオンモール和歌山
	地域 FW 協力	：道成寺、株式会社味噌本舗やまだ、田中味噌醸造元、醸造元天田屋、三つ星醤油堀河屋野村
地域産業	校外研修	：和歌山大学、株式会社シガ木工、和歌山県庁、ぶらくり丁、和歌山城、観音山フルーツガーデン、青岸クリーンセンター、めつけもん広場、リノベーション和歌山
	地域 FW 協力	：県庁日高振興局、JA 紀州、NHK 和歌山放送局、和歌山県社会福祉事業団、有限会社金崎竹材店、日高町役場、大洋化学株式会社
地域防災	校外研修	：美浜町松原地区高台津波避難場所、和歌山県庁南別館防災センター
	地域 FW 協力	：美浜町役場、愛徳保育園、つばさ保育園
移民難民	校外研修先	：海外移住と文化の交流センター (神戸市)、神戸大学
	地域 FW 協力	：御坊商工会議所、太陽誘電株式会社、大洋化学株式会社、レジェ株式会社、地域の学校勤務の FLT

(4) 中間発表会

日 時： 2018 年（平成 30 年）10 月 9 日（火） 午後（5～7 限）

内 容：

テーマ別分科会の形式で、中間発表会を実施した。研究動機、現在の状況、困っていること等について班ごとに発表し、大学教授等から研究の進捗状況に応じたアドバイスを受けた。また、今年度は生徒相互コメントシートを導入した。



(5) 成果発表会

日 時： 2019 年（平成 31 年）3 月 6 日（水） 午前（1～3 限） 分科会
2019 年（平成 31 年）3 月 7 日（木） 午後（4～7 限） 全体会

内 容：

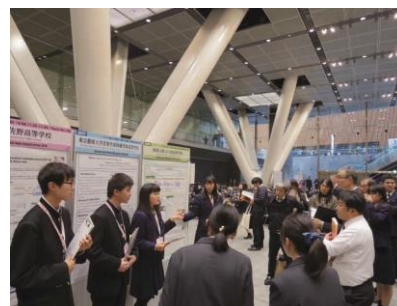
テーマ別分科会では、各班が 1 年間の研究の成果を発表した。総合科学科生徒も興味のある分科会に参加した。各参加者は各発表について 10 の観点に基づいて評価を行い、その結果をもとに全体会の発表班を選出した。指導助言者からは、1 年間の取組についてきめ細かく講評をいただくことができた。発表生徒は 3 学年での論文作成に向けて、1 年間の取組を振り返り、改めて成果を確認した。英語での発表も昨年度より本数が増え、英語で発表することが生徒に浸透していることが感じられる。

全体会では、午後の部で 2 年生の SG 課題研究 II 代表グループの発表が行われた。より多くの生徒が発表できるよう、昨年度より代表発表の本数を増やした。また上級生の取組について発表を聴くことは、1 年生の来年度の取組に向けた意識の向上に役立っている。

(6) 校外への普及

・ SGH 全国フォーラム（東京都）

SG 課題研究 II における探究活動をポスター化し、英語で発表した。今年度は防災分野で「HIDAKARD ～Simulating Evacuation Center Management System with Foreigners～」に取り組むグループが代表発表した。



・ SGH 甲子園（兵庫県）

SG 課題研究 II における探究活動をポスター化し、発表した。今年度は防災分野で「防災カレンダー計画」に取り組むグループが代表発表した。

・ 中間発表会

今年度は福島県の 3 名の教諭にも参観していただき、評価コメントを得た。

・ 成果発表会

県内全高校に案内を送付し、参加を呼びかけた。また今年度は、校外でのフィールドワークで訪問や聞き取りにご協力いただいた事業所や自治体に、発表会の案内を送付した。一度の訪問であっても研究の結果をきちんと伝え、地域とのつながりを大切にすることが、来年度以降の生徒の研究充実につながると考える。

・ SGH 海外研修

SG 課題研究 I～IIIを通して養うことを目標としている、本校が身に付けさせたい力「グローバルスキル 8 項目」の実践の場として SGH 海外研修を設けている。同時に、SG 課題研究 II で取り組む探究テーマを深める場として 3 つの派遣先を設定している。各派遣先における研修内容については「II 海外研修」に記載した。

* グローバルスキル 8 項目：やる気、想像力、コミュニケーション力、グローバル力、協働力、マネージメント力、発信力、参加・参画力

(7) 生徒の学び（各種報告より）

・ 探究活動

一年間の探究活動についての生徒の振り返りには以下の 6 点についての記述が多く見られた。

1 探究活動に対する姿勢

- ・物事に疑問を持って追求しようとする姿勢が身につき、成長したと思う。
- ・自主的に考え、疑問を持ち、その解決に向けて力を注げるようになった。
- ・1 つのことを調べるにあたって粘り強くなった。あきらめずに調べることで成長できた。
- ・自分たちで目標を設定して、それを達成するために何をすべきかいろいろ考え、行動に移せるようになった。

2 社会的な問題への関心

- ・一人一人が自国のことに積極的になるべきだと感じられる授業だった。
- ・世界で起こっている問題を他人事だと思わずに身近に考えられるようになった。
- ・この授業で移民について学んだことを生かしてカナダ研修に参加し、より理解が深まったと思う。4 月はまだ、移民や難民に対し、差別的な目で見えてしまっているところがあったが、今はそういう目で見ることがなくなった。

3 チームワーク

- ・グループで一人一人の意見をまとめて 1 つのものを完成していくというのは、とても難しいことだと思った。僕自身はグループで活動していくための協調性が成長できた。
- ・他人と意見を交換して、他人や自分の考えを共有しながら、よりよい答えを出せるようになった。
- ・自分の意見を積極的に出し、自分のやるべきことを全うすることができた。

4 コミュニケーション

- ・話すことや相手に伝えることの難しさを学んだ。
- ・他の人に、自分が持っている情報を伝えることの難しさを学んだ。自分たちが今どのようなことを調べていて、どのようなことを知りたくて訪問先を訪れた

のかなど、適確に言うことができなかった。

- ・ (SGH フォーラムで) 他国の人とコミュニケーションをとる際、自分の言いたいことを伝えようとする姿勢が大切だと学び、以前に比べると自分の意見を述べられるようになったと思います。

5 研究のためのスキル

- ・ アンケートの結果を基にして冊子を作っていく中で、結果を活用していくのが想像していた以上に難しかった。結果が想定と全く異なっていたこともあって、実施することの重要さがよくわかった。

6 地域への愛着

- ・ 御坊祭りを調べていく過程で、地域への愛着心がより高まり、これまでの歴史を守りたいと思うようになった。

・ 校外研修

午後の講演では、防災力 UP のためには人と人との繋がりが大切だと学びました。今、御坊地域は祭りの季節です。御坊地域の人々は昔から祭りや地域のイベントを大切にし、たくさん参加してきました。私たちが取り組む防災とは一見離れているようで、実は防災力を高めるための良い関係を普段から築いているのではないかと思います。また、今私たちのグループが総学で作成している英語版 HUG を使って外国の方と交流することも、お互いの防災力 UP に繋がっていくのだと感じました。これからも地域の行事にどんどん参加し、繋がりを大切にしながら、防災力を高めていきたいと思います。(地域防災テーマ・2年生)

・ SGH 全国フォーラム

私がこの研究を通して学んだことは二つ。まず、災害時に自分たちは何をすべきかということだ。私たち高校生は、十分避難所運営の力になれる。そのため、「協力」を大切にすること、そしてその意識を事前に高めておくことが必要だということも学んだ。次に、英語にしてもその他のコミュニケーションにしても、何より積極性が大事だということだ。自分からやらなければ何事も始まらないと、分かってはいたが、実際に大勢の高校生と交流をして、その思いが何倍にも強くなった。他府県の高校生の英語能力の高さ、意見を堂々と言う姿勢が本当に印象深く、良い刺激を受けることができた。(代表グループ・2年生)

(8) 3年間の成果と4年次に向けての課題

・ 成果

① 研究内容の質的な深まり

初年度は、週1単位だったため、調べ学習に近い研究内容が多く見られた。2年次以降は、徐々に課題研究の意識が高まり、地域課題を調査研究した上で自分たちなりの解決法を示すという基本姿勢が身についてきた。高校生らしい視点を生かした取組も見られるようになっている。

②地域への広がり

自分が扱うテーマについて、図書やインターネットで調べるだけでなく、実際に地域に足を運んで調査を行ったり、地域の団体や個人に働きかけたりする動きが始まっている。アンケートの記述からもこの経験が生徒の成長につながったことが読み取れる。この地域とのつながりを来年度以降も維持発展させていく。

③英語への意識と姿勢の変化

上記の SGH フォーラム、英語での研究成果物作成、英語での発表など、生徒一人一人が、英語の授業外の目的を持って英語を使うことで、英語を使ったコミュニケーションに意欲が高まってきつつある。

・課題

①チームビルディング

5人の研究チームの中には、意欲の差が生じ、まじめに取り組む生徒に仕事が集中することが起こりうる。原因としていろいろな要素が考えられるが、教員がどのように関わっていくかは今後の課題である。

②外国人教員の効果の波及

上記に、英語に関する成果を挙げた。これには外国人教員と FLT の貢献が大きい。発表原稿、成果物に使用する英文などの添削と発音指導を担当していただいている。しかし、それだけでなく、日々の授業においても直接的に生徒を指導する場面を増やし、より効果的に活用することができるシステム作りが課題である。

(9) 探究テーマ一覧

地域文化	1	愛する故郷に観光客を
	2	金山寺味噌を食べてもらおう
	3	方言～今まで明かされてこなかった語尾～
	4	歴史ある祭りを後世に残すために～御坊祭り～
	5	国道 42 号線からみる和歌山
	6	私たちが使っている方言
	7	安珍・清姫を世界へ
	8	道成寺の民話
地域産業	1	農家の後継者不足
	2	スターチスで御坊を活性化
	3	プラスチックの危機
	4	地域の活性化
	5	地元の飲食業を通じた地域活性化
	6	地域活性化のために
	7	地域の産業について
	8	黒竹と御坊人形（地域の伝統文化）
地域防災	1	排泄問題
	2	災害時における SNS の活用
	3	避難カードについて考えよう
	4	簡略化ハザードマップ
	5	台風から身を守るために……
	6	防災カレンダー計画
	7	防災教育
	8	HIDAKARD～避難所運営シミュレーションカードゲーム～
移民難民	1	移民（ドイツにおける移民教育と多文化共生）
	2	難民（難民の定義を見直す）
	3	移民（移民と学力）
	4	移民（和歌山の魅力と移民への PR）
	5	難民（難民受け入れ政策）
	6	移民（移民の労働環境）
	7	移民（人身取引）
	8	移民（国外移民受け入れにより日本国民に影響があるのか）

【総合科学科】

課題研究

(1) ねらい

地域の現状と課題について自然科学の観点から検討し理解するとともに、必要な情報を収集し、自然科学の手法を用いて潜在的な可能性を追求する。これらの学習を通じて、課題を発見し探究する能力の向上を図り、広い視野を持ちながら課題の解決に迫る姿勢を育成する。

(2) 内容と方法

①事前説明の実施

1年次の2月、「総合的な学習の時間」の授業において、平成30年度の課題研究の実施内容に関する説明会を行い、希望する研究分野・テーマなどについてのアンケート調査を行った。

②テーマなどの決定

事前に実施したアンケートなどをもとに、平成30年度の課題研究の実施内容について提示し、研究グループと担当教員・分野を決定した。

各グループ内で、研究テーマおよび研究計画などの策定を行った。

③研究活動の実施

各グループで研究の目的・方法などを検討し、研究を行った。研究結果は、和歌山県生徒科学研究発表会と日高高校 SGH 成果報告会で発表した。

④各研究の実施内容

以下のテーマについて例示する。

(a) 「日高高校生、豆腐作るってよ。～豆腐と凝固剤の関係性～」

日高御坊地域は、花卉栽培や野菜栽培の盛んな地として知られている。中でもエンドウは御坊市と日高川町を中心に栽培され、全国的にも知られている。

この研究では、化学分野の研究による新たな地元産品の開発が可能かどうかの観点から、エンドウマメに着目。エンドウマメ豆乳から豆腐生産に挑むための基礎研究として、豆腐と凝固剤の関係性について、有用性や規則性を明らかにする実験を行った。

(b) 「微生物、発電するってよ。」

水田が多いことから発想を広げ、水田の泥に生息する微生物を利用した発電の可能性について研究を行った。

扱う内容が最先端で高度な内容であり、自分たちだけで解決できないことが多いことから、必要な助言や情報源については、生徒自身がメールなどで大学教授に直接求め、得られた資料を基に試行錯誤しながら研究を進めた。また、高額な用具を用いない方法を模索し、発電力を高める工夫をおこなった。必要なデータの性格上、授業日以外の日だけではなく、休日も登校して研究を行っ

た。

予想と異なる結果が連続したが、ひとつひとつの事象について丁寧な考察と再実験をくり返し粘り強い研究をおこなった。

和歌山県生徒科学研究発表会では、ステージ発表を行った。

(c) 「HIGATA QUEST ～進め！宮川探検隊～」

日高川下流域に広がる日高川河口干潟は、環境省が設定する「重要湿地」の一つに選定されており、貴重な生物の生息地となっている。しかし、残念なことに、その重要性や利用の可能性については、一般的には認識されていない。

このテーマは、河口干潟の重要性を再認識するとともに、意識されていない利用法について手がかりを探った。

(d) 「御坊に元気を分けてくれ！ 電力自活大作戦」

電力自給をそれぞれの地域ごとに、再生可能エネルギーなどにより自活することは、温暖化などの環境問題に加えて、防災の観点からも重要である。この研究では、水田地帯で、農業用水の関係で水路が多い地形に着目し、先ず、小水力発電に注目し、次に南に開けた地形に着目し、太陽光発電に注目した。

小水力発電では、実際の水量や発電機の設定場所の選定、発電機の作成や地元水利組合への聞き取りなどを行った。太陽光発電では、設置可能なパネルの数を推定し可能な発電量を推定した。これらの推定値をもとに電力自活に向けた提案を策定した。

< 課題研究テーマ一覧 >

	小分野	テーマ
1	物理	ピタゴラスイッチ・ミニ
2	化学	日高高校生、豆腐作るってよ。～豆腐と凝固剤の関係性～
3	生物	微生物、発電するってよ。
4	生物	HIGATA QUEST ～進め！宮川探検隊～
5	生物	光合成細菌の有効活用をめざして
6	生物	アリの視覚、嗅覚について
7	地学	川のカーブにおける流速と石礫の関係
8	数学	数字が織りなすカードマジックのからくり
9	数学	ハンサム顔と美人顔の謎に迫る!?
10	数学	イケメン関数
11	保健体育	天才ワールド ～Heartbeat magic～
12	環境	御坊に元気を分けてくれ！ 電力自活大作戦

(3) 和歌山県生徒科学研究発表会

日 時： 2018 年（平成 30 年）12 月 13 日（木）

会 場： 和歌山県民文化会館

内 容：

午前に行われた SSH 指定校ステージ発表にまじり、本校の「微生物、発電するってよ。」が参加した。午後からは、各ブースでポスター発表が行われ、課題研究全テーマが参加し、聴衆とのディスカッションを行い、研究内容についての理解を深めた。ポスター発表では、他校の研究内容も知ることができ、よく似たテーマでは情報交換を行った。また、大学教員などの専門家からも指導を受けることができた。自分たちの発表を基にディスカッションする形は、生徒に大きな刺激となったことが、振り返りの中でも確認できている。

閉会式では、ポスター発表の各部門から優秀者が表彰され、本校からは、「光合成細菌の有効活用をめざして」と「御坊に元気を分けてくれ！ 電力自活大作戦」が選ばれた。

(4) 成果発表会

日 時： 2019 年（平成 31 年）3 月 6 日（水） 午前（1～3 限） 分科会

2019 年（平成 31 年）3 月 7 日（木） 午後（4～7 限） 全体会

会 場： 日高高校体育館

内 容：

分科会では、普通科 4 クラスの成果発表に参加した。

全体会では、ポスター発表を行い、12 月の生徒科学研究発表会で指摘された部分などを検討・発展させた成果を発表し、ディスカッションを行った。前日の発表会も同様だが、自分たちの成果を伝え、その場でディスカッションすることは、情報発信だけでなく、相手の意図を理解しきちんと答える必要がある点から、コミュニケーション力の向上に有効であった。ポスター発表の観覧者には評価シートを配布し、感想や意見を提出してもらった。自分たちの成果を同級生や教員に聞いてもらったことで、改めて考えを整理させることができた。特に、1 年生や附属中学生に説明し理解してもらおう作業は、より分かりやすく説明する必要がある。この発表には 1 年生や附属中学校生も参加し、次年度以降の取組に向けた意識付けの場となった。

(5) 生徒の学び(自己評価シートより)

アンケートなどの記載では次のような項目が見られた。これらの記載から、生徒は探究活動に対しておおむね前向きに取り組み、失敗やつまずきから多くのことを学んでいることがわかる。研究により研究対象に対する理解だけでなく、様々なことに興味や関心を広げていること、発表の機会を通じて自分の研究に対する理解が深まることもうかがえる。

① 探究活動に対する姿勢

- ・ 同級生と先生が考察について議論している内容を聞いてすごく納得でき、また面白いと感じた。また、説明するのも楽しかった。

- ・ 実験結果を基に考察するのはとても面白いと感じたし、先生と討論するのはよい経験になった。
 - ・ 普段着目しない点を深く考えることで新たな発見を見つけることができた。
 - ・ みんなで計画を立てて調査し、協力して計画を実行するのが楽しかった。
 - ・ 夏休みの水やりなどは大変だったが、それ以上に責任感や結果が出たときの楽しさや達成感を得ることができた。
 - ・ 1年間という長い期間で一つのテーマについて研究することはたいへんだが、それ以上に学ぶことや得ることがあるのでとてもよい授業だと感じる。
 - ・ 教科書では学習しないところまで予習したり、範囲を広げて学んだりすることができた。
- ② 社会的関心
- ・ 干潟にしか生息しない生物がたくさん見られたので、干潟を「整備」せずに残すことが必要で、場合によっては人を集める観光地のようなものにしてもよいのではないかと思った。
 - ・ 御坊市に絶滅危惧種がいることを知らなかったので、環境保全をもっとしなければと思った。また、台風のあとのゴミのことなどゴミ問題や水質汚染についてもっと大きな問題として考える必要性を思った。
 - ・ 地域のエネルギー資源の可能性について考えることができた。
 - ・ エネルギー的に自活することができるかもしれないことに気づいた。
- ③ チームワーク
- ・ 結果がうまくならず行き詰まったときは、それがなぜなのかもう一度みんなで考えた。話すことにより新しいアイデアや解決策が見つかったこともあった。
 - ・ 班内の目標や意思の統一ができなかったことが反省点
 - ・ 今自分がどのような行動をすべきなのかよく考えるようになった。
- ④ コミュニケーション
- ・ 自分の学んだことをきちんと伝えられたときはうれしかった。
 - ・ あまりにも知らないことが多かったので、発表するときにもっとわかりやすくできたらよかった。
 - ・ 自分一人なら思いつかない条件など、自分たちが発信することでそれを見た方々にアドバイスをもらえたりしたので、調べて研究するだけでなく発信することで得られるものもあるのだと感じた。
 - ・ 発表したことに理解を示してくれたことはとてもうれしかった。
 - ・ 自分の考えを伝えるのはすごく難しいが、議論するのは面白い。
 - ・ 発表の機会が2回あったことで、発表の内容ややり方について修正することができてよかった。
- ⑤ 研究のためのスキル
- ・ 研究における考察や実験によって得られたデータをまとめることの難しさを感じたが、論理的に物事を考えられる能力が少し身についたと思う。
 - ・ 身近にあるものも、自分たちで考えていくと科学的に考えることができるのだということがわかった。
 - ・ 「この事実を確かめるためにはどんな実験をしたらよいか」「実験が失敗しても、そ

の原因は何なのか」等、他にもたくさんのことを自分なりに考えメンバーと話し合うことができたと思います。

- ・一つの学問分野にこだわらず、分野融合で考え、様々なアプローチを持って研究を行うことができた。
- ・目的のために段階を踏んで実験ができるようになった。

⑥ その他

- ・和歌山市で行われた発表会では、他校の生徒の様々な研究も聞くことができ、始めて知ったことがたくさんあってよかった。
- ・光合成細菌について、教科書での学習内容とは比べものにならないくらい活用事例などがあることに驚いた。
- ・全く知らなかったことに興味をもち、いろいろなことを試すことができたのは楽しかった。

(6) 3年間の成果と4年次に向けての課題

① テーマ決定と研究の進め方

今年度の課題研究では、グループ内で研究の進め方についての議論が活発に行われた様子が、アンケートの記述からうかがえるとともに同様の声が担当教員からも寄せられている。これは附属中学校時代から探究的な学習を取り入れてきたことに加え、成果発表会などへの参加により、探究活動に取り組む姿勢が向上してきた結果だといえる。研究テーマの決定に関しても、これらの経験が生かされている。しかし、依然、教員に依存した形でテーマを決定するケースも少なくない。身近なところに関心や疑問を持つ姿勢を育てることがこれからも求められる。

② 社会的事象への関心の広がり

身近なところから発想を広げた研究内容が年々多くなっていることから、単に自然科学研究にとどまらない関心の広がりが出てきたといえる。これは、担当教員の意識にも現れている。

③ 英語への意識

英語による成果物の作成などはすすんでいないため、課題である。

3 学年 SG 課題研究Ⅲ（総合的な学習の時間）

SG 課題研究Ⅲは 1 単位で実施している。2 年次にグループで探究活動に取り組んだ過程及び成果について、3 年次では一人一人が個人論文として整理した。全体の流れは以下の通り。

1 全体の流れ

学習のねらい（目標とするスキル）		
普通科/総合科学科		
(ア) 活動を言語化して整理する力 (イ) 論理立てて記述する力 (ウ) 英語化する力		
実施内容		
月	学習項目（学習時間：全 8 時間）	学習活動
	普通科/総合科学科	
4 月	1. 論文の構成と型（1）	<ul style="list-style-type: none"> ・ 研究論文の形式を学ぶ。 ・ 研究内容を論文にする。 ・ 要約を英訳する。 ・ 論文をデータ化する。
5 月	2. 論文作成（6）	
6 月	3. 英語要約作成（1）	
7 月		

2 学科の特性と学習活動

【普通科】 【総合科学科】

総合的な学習の時間**(1) ねらい**

2 年次までグループ単位で取り組んできた探究活動を、3 年次では個人で総括し、論文として言語化する。それにより、上表にある「言語化して整理する力」「論理立てて記述する力」を涵養する。また、全員が英語要約に取り組むことで、英語への得意不得意という意識に関係なく、誰もがグローバルで活躍する人材として立脚していることを意識させる。

(2) 内容と方法

これまでの探究活動を素材として、個人の視点で総括し、論文化する。2 年次とは異なり、3 年次ではクラス単位かつ個人単位で、情報教室や生徒用パソコンを活用して作業を進める。また、英語要旨の作成に取り組む。

(3) 3 年間の成果と 4 年次に向けての課題**・ 成果**

論文の形式を定め、生徒が取り組みやすいようひな形を整えることができた。これは昨年までの試行錯誤を経ての成果である。また、三年の間で、生徒への貸出パソコンとして、教室で作業できるノートパソコン 40 台を整備することができた。これは新規購入したのではなく、県備品パソコンの入替に伴い、貸し出し用に確保、設定し直したものである。

修理サポート等は終了しているため長期的な設備とはできないが、当面の間、授業の円滑な展開を支える要素となっている。

・課題

第 1 回目の運営指導委員会では「生徒の動機」を促す手立てを考えてはどうかとの指摘を受けた。具体的には表彰等の形式で、よりよい論文に仕上げようという生徒の動機を喚起する仕組みを設けてはどうかというものである。確かに、他からの評価を意識することで向上心をかき立てられる生徒も多いと考えられる。生徒による相互評価を取り入れる等、実現し得る工夫をしていきたい。

II 海外研修

1 研修設定

SG 課題研究 I～IIIを通して養うことを目標としている、本校が身に付けさせたい力「グローバルスキル 8 項目」の実践の場として SGH 海外研修を設けている。同時に、SG 課題研究 II で取り組む探究テーマを深める場として 3 つの派遣先を設定している。探究テーマと研修との関わりは以下の通り。なお、地域文化学修についてはいずれの派遣先においても異文化と自らの住まう地域について比較探究する姿勢を培うことができると考えている。

- (1) 地域防災学修「ふるさとの防災に学ぶ」—— インドネシア研修
- (2) 移民の歴史学修「ふるさとの先人に学ぶ」—— カナダ研修
- (3) 地域産業学修「ふるさとの産業に学ぶ」—— ベトナム研修

2 研修の流れ

月	派遣の流れ
4 月	
5 月	
6 月	1. 募集開始 (6 月 18 日～22 日)
	2. 派遣生徒選考 (6 月末～7 月上旬) ※課題レポートおよび面接
7 月	3. 派遣生徒決定 (7 月 20 日)
	4. 事前研修開始 (夏休み～派遣まで随時) ※英語研修およびテーマ別研修
8 月	
9 月	
10 月	5. インドネシア研修 (10 月 14 日～20 日)
11 月	6. カナダ研修 (11 月 4 日～9 日)
12 月	7. 研修報告会① (12 月 21 日)
1 月	8. ベトナム研修派遣 (1 月 14 日～19 日)
2 月	
3 月	9. 研修報告会② (3 月 22 日)

10. 各派遣団は帰国後、事後研修を実施



FLT による英語事前研修

3 海外派遣

1 インドネシア研修

・ねらいと研修プログラム

(1) インドネシアにおける防災対策、自然災害への危機管理と取組について連携機関で学ぶ。

プログラム1 国際協力を学ぶ —— JICA インドネシア事務所

プログラム2 アジア経済の仕組みを学ぶ —— ERIA ジャカルタ本部

プログラム3 世界遺産の被災と復興を学ぶ —— ボロブドゥール遺跡

(2) 「総合的な学習の時間・防災分野」の取組を紹介するとともに、現地高校生と協働学修を行う。

プログラム4 英語を用いた協働学修に取り組む —— マダニア高校

(3) 研修期間を通してコミュニケーション力を磨き、自国文化および異文化への理解を深める。

プログラム5 異文化の中で自らを客観視し、成長させる —— 現地研修

プログラム6 事前事後研修を含むすべての研修の中で協働することの意義を学ぶ —— 日本、インドネシアにおける全研修

・日時

2018年（平成30年）10月14日（日）～10月20日（土）

・研修先

インドネシア共和国（ジャカルタ市、ジョグジャカルタ市）

・事前研修、事後研修

事前研修①英語研修：夏期休暇中7回

事前研修②プレゼン準備、インタビュー準備：9月～10月

事後研修 研修総括、プレゼン準備、報告書作成：10月～1月

・研修団構成

参加生徒：2年生1名 1年生6名 引率教員：2名

・研修日程

日次	月日(曜)	地名	現地時刻	交通機関	予定(宿泊地)
1	10/14 (日)	関西空港 集合 関西空港 発 ジャカルタ 着 ホテル着 夕食・ミーティング 点呼 (日本時間)	09:30 12:40 17:20 19:40 20:00 20:50 (22:50)	GA889 専用車	* 集合場所 第1ターミナル4階国際線出発ゲート (ジャカルタ市内泊)
2	10/15 (月)	ロビー集合 JICA事務所着 ホテル着 夕食・ミーティング 点呼	08:00 08:35 16:15 17:50 20:30	専用車	・ JICAインドネシア事務所 (9:30-11:50) ・ ERIAジャカルタ本部 (13:00-15:30) (ジャカルタ市内泊)
3	10/16 (火)	集合出発 マダニア高校到着 マダニア高校出発 ホテル到着・夕食 点呼・ミーティング	07:00 08:40 15:50 17:20 20:30	専用車	・ マダニア高校 (8:50~15:40) (ジャカルタ市内泊)
4	10/17 (水)	集合出発 ホテル到着・夕食 点呼・ミーティング	10:00 17:50 20:30	専用車	・ ジャカルタ市内視察研修 モスク/カテドラル/国立博物館 (ジャカルタ市内泊)
5	10/18 (木)	集合出発 ジャカルタ 発 ジョグジャカルタ着 ジョグジャカルタ発 ジャカルタ 着 ホテル到着・点呼・ ミーティング	06:50 08:00 09:20 19:20 20:25 21:40	専用車 GA204 専用車 GA215	・ 世界遺産の被災と復興研修 The Borobudur Temple (ボロブドゥール史跡公園) Prambanan Temple Compounds (プランバナナ寺院史跡公園) (ジャカルタ市内泊)
6	10/19 (金)	集合出発 空港到着 スカルハッタ空港出発	11:00 19:20 23:20	専用車 GA888	・ ジャカルタ市内視察研修 独立記念塔/歴史博物館/旧オランダ街 関西空港へ(所要時間：6時間55分)
7	10/20 (土)	関西空港 解散	08:30 10:00		* 到着時刻、入国手続所要時間の都合で 解散時刻は、前後することがあります

・生徒の学び

(1) JICA 研修・ERIA 研修

JICA と ERIA を訪問して、インドネシアの人々の良いところや生活面の課題など、多くを学びました。インドネシアの人々は「昨日より今日、今日より明日」という考えを持っており、常に前向きに、未来の幸せを信じているということを知りました。近年の日本人にはあまり見られないこの前向きな考え方は、日頃の生活や仕事で意欲を高める効果があると思います。やはりインドネシアはこれから大きな発展の見込みがある国だと納得しました。

一方で、自然災害の多い国であるのにも関わらず、防災対策がしっかりされていないという現状があります。それは、今日明日の生活費でいっぱい、いつ起こるか分からない災害のためにお金と時間を使う余裕のない人が多いからだということでした。質問する中で HOPE という日本の団体の活動や、「その人の生活を支えながら防災意識を高めていく」というすばらしい考え方も知ることができ、本当に多くのことを学べた研修となりました。(1年生)

(2) マダニア高校での協働学修

マダニア高校の発表からは、インドネシアでの地震による死亡原因の第一は津波によるもので、二番目に多いのが建築物による圧死だということがわかった。日本のように、耐震工事をしてもっと強化すべきだと思ったが、JICA 研修で「インドネシアでは今日の夕飯の心配をするくらい毎日毎日暮らしていくことが精一杯で一生懸命だ」ということを学んだばかりだった。そんな彼らが未来のためにお金を費やすことはまだまだ難しいことなのだと理解はしたが、一人でも多くの命を救うためにも、一人でも多くの人に防災知識を理解してもらうことが必要になってくると感じた。

協働学修は、自分たちや日本の取組を改めて振り返る良い機会になった。また、アルファ米のような、現地には無い日本の非常食を伝えることもできた。とても有意義な時間になった。(2年生)

(3) 市内研修（宗教の多様性）

日本ではなじみのないモスクや大聖堂を間近で見ることができ、宗教の大きな力を肌で感じることもできた。一つの宗教だけではなく、様々な宗教の建物が混在しているところがとても印象的だった。宗教同士でいがみ合う、という印象があったが、マダニア高校の教育からも、モスクから大聖堂が見えるという都市構造からも、人々の寛容な精神を感じとることができた。(1年生)

(4) 研修を振り返って（英語力）

初めての海外で不安だらけでしたが、実際に自分の目で確かめて、自分の肌で感じてみて、この研修に、このメンバーで行くことができるととても良かったと感じています。

渡航する前から、自分に英語を聞く力や話す力がないことはわかっていたのですが、実際にインドネシアの方々と英語で話そうとしたとき、うまく言いたいことが言えず、困ってしまいました。グローバル社会が加速する中で、このままではいけないと痛感

しました。帰国した今、普段の英語の授業からしっかり受けることを心がけて、今まで以上に英語に興味を持って勉強したいと思います。

海外研修でたくさんのことを学びました。本当に参加できてよかったです。

(1年生)

(5) 全体報告

このインドネシア研修の目的は、お互いの国の防災、そして文化や歴史について学び、発信するということでした。私たちの住む地域では近い将来南海トラフ大地震が来ると予想されています。様々な被害が考えられる中、私たちに必要なのはそれらの震災に対する知識であると私は考えました。一人一人の防災に対する知識や考えが、地域全体の防災につながっているのだと思います。よって私は、まず自分の防災に対する知識を深め、それを発信することによって地域の防災に役立てることが出来るのではないかと思います。この研修に参加しました。私はこれで二度目の海外研修ですが、初めて行った西安交換留学では、日本と大きく違う文化や歴史にとっても驚いたと同時に、現地に行かなければ分からないことも多くあるのだなと感じさせられました。今回のインドネシア研修でも、イメージや先入観とは違った、行かなければ分からないことを感じる事が出来ました。

インドネシアはいま急成長中の国で、高層ビルが立ち並ぶ大きな主要道路、ひしめき合う道路上のバイクや車の多さ、日本では見たことのない風景に圧倒されました。美しく整備された道路や建物がある一方で、少し脇道に入ると風雨をしのぐためだけの建物が見え、それらが1つの景色の中に存在している姿が、大きな経済格差を象徴しているように思えました。しかし、市場や道路上で物を売っている人々やバイクに乗って仕事に行く人々は、明るい表情だったように思います。JICAの方がおっしゃっていた、「インドネシアの人々は今日より明日の方が良くなると信じている」ということに納得しました。独立記念塔の上に登るエレベーターに先に乗らせていただいたり、お店などで親切に対応して下さったりと、人々の優しさ、心意気も感じました。

マダニヤ高校との交流において、私たち日高高校が行っている防災の取組を発表する機会があったのですが、私はその発表で自分の計画性と行動力のなさ、準備不足を思い知らされました。このような発表をするためには、やはりこの発表をする目的や意義を私たちが一番理解していないと出来ないことです。ただやれと言われたからするという受動的な立場のままでは、自分たちが伝えるべきことが十分に伝わらないということを学びました。これらのことは、インドネシア研修に参加したからこそ学べたことであると思います。この研修は、大げさかもしれませんが国を代表して訪問しているとの見方もできます。それほどの責任がある上での体験はとても貴重なものだと感じました。

自分の先入観と知識のみで物事を見るのと、実際に自分の目で見て肌で感じた上で見るのとでは、見方も感じ方も、大きく違うものになると思います。海外研修に参加してみないと感じられないこと、学ぶことのできないことはたくさんありました。価値観が広がったという意味でも、海外研修に参加した意味は大きかったと思います。

(1年生)

・ 研修の記録

(1) 事前研修



(2) ERIA での英語講義



(3) マダニア高校で、アルファ米の協働調理および試食



(4) 市内研修時、現地高校生よりインタビューを受ける。



(5) プランバナン遺跡にて、倒壊した遺跡とその復興状況を見学。



2 カナダ研修

・ねらいと研修プログラム

(1) 日系カナダ移民の歴史について学修を深める。

- プログラム 1 バンクーバー市近郊のジョージア湾缶詰工場国定史跡の見学
 ——スティーブストン缶詰工場史跡
- プログラム 2 日系カナダ人からの聞き取り調査および交流
 ——スティーブストン・ブディストテンプル

(2) 異文化コミュニケーション、異文化理解に関する見識を深める。

- プログラム 3 現地高校生との協働学修
 ——リッチモンドセカンダリースクール
- プログラム 4 インタビュー調査を主とするフィールドワークの実施
 ——スタンレーパーク、グランヴィルアイランド

(3) 生徒自らの主体性を涵養する。

- プログラム 5 生徒自らが計画実行する「自主研修」の設定
 ——グランヴィルアイランド
- プログラム 6 事前事後研修を含むすべての研修の中で協働することの意義を
 学ぶ ——日本、カナダにおける全研修

・日時

2018年（平成30年）11月4日（日）～11月9日（金）

・研修先

カナダ・ブリティッシュコロンビア州（バンクーバー市、リッチモンド市）

・事前研修、事後研修

事前研修①英語研修：夏期休暇中9回

事前研修②プレゼン準備、インタビュー準備：9月～11月

事後研修 研修総括、プレゼン準備、報告書作成：11月～3月

・研修団構成

参加生徒：2年生8名

引率教員：2名

・ 研修日程

日次	月日(曜)	地 名	現地時刻	交通機関	予定(宿泊地)
1	11/4 (日)	関西空港集合 関西空港発 成田空港着 成田空港発 バンクーバー空港着 バンクーバー	12:30 15:25 16:45 19:40 10:05 10:55	GK204 AC004 旅行社バス	第1ターミナル2F集合 ジェットスターカウンター前 スタンレーパーク、ギヤスタウン、オリンピック聖火台見学。 ウォーターフロント、ギヤスタウン見学。 ミーティング 点呼 (バンクーバー 泊)
2	11/5 (月)	バンクーバー リッチモンド バンクーバー	08:50 11:50 12:30 15:00 16:00 17:00 21:00	専用バス	UBC キャンパス訪問 スティブストンへ移動 和歌山県人会(訪問・交流) STEVESTON Buddhist Temple スティブストン缶詰工場史跡(見学) Gulf of Georgia Cannery National Historic Site バンクーバーへ移動 ホテル到着 点呼 (バンクーバー 泊)
3	11/6 (火)	バンクーバー	09:00 12:00 21:00	公共交通 :市バス 公共交通 :市バス	バンクーバー市内自主研修(1) 現地インタビュー バンクーバー市内自主研修(2) グラビティポイント 点呼 (バンクーバー 泊)
4	11/7 (水)	リッチモンド バンクーバー	07:00 08:00 08:20 08:30 11:15 12:40 15:00 15:20 16:00 16:20 21:00	公共交通 往復:列車	集合出発 駅発 リッチモンド駅着 Richmond Secondary School(交流) 各授業に参加 プレゼンテーション 日本語クラス生徒とランチ 日本語クラスの授業に参加 学校出発 リッチモンド駅発 シティセンター駅着 ホテル到着 点呼 (バンクーバー 泊)
5	11/8 (木)	バンクーバー バンクーバー空港発	09:45 13:45	旅行社バス AC003	ホテルチェックアウト、出発 (機中 泊)
6	11/9 (金)	成田空港着 成田空港発 関西空港着	16:45 20:35 22:15 22:40	MM318	乗り継ぎ 到着後、解散

・生徒の学び

(1) 和歌山県人会の方々と交流

日本人移住者の方々のお話をお聞きしていると、小さい頃からカナダで過ごしていたため、日本での生活に窮屈を感じるということが分かった。同じ日本人の血が流れ、日本語を喋っていたとしても、幼い頃の環境の違いで価値観や文化が大きく変わってくるのだと思った。各国ごとの環境の違いを理解し、異文化や異なる価値観を受け入れることは大事なことだと思う。移住者がどの国へ行っても、周りの人々の優しさや包容力を感じられるようになる時が、言語や文化の壁を越える時だと思う。自分の国に対する誇りを持ちながら、英語で上手く表現できなくても多くの人と交流していきたい。(2年生)

移民の方からの話に「日本人として」「日本人という誇りを持って」という言葉をよく耳にした。「日本人として受け入れてもらうために、信頼を得るために」、自分たちの行動と態度で示してきたということを知って、このような1世の人々の歴史を引き継いで伝えることが必要だと思った。また高齢化が進む今、私たちが情報を発信していくことが大切だと感じる。(2年生)

(2) 現地インタビュー調査

アンケートを取ってみて、カナダは移民の人が住みやすい国だと思った。"There are chances."と言っていたことが印象的で、移民の人たちにとって機会があるということは、移民の人が活躍できる場が多いということでもある。これは移民国家であるカナダだからできるのだと思った。また日系移民とカナダの関係を知らない人が多かった。移民の人がカナダに来た理由は様々だったが、私が質問した人は皆、カナダに来て良かったと言っていたことから、カナダは移民の人たちにも旅行者にも住みやすい、良い国だと思った。(2年生)

(3) 現地高校生との交流

学校訪問において、生徒が主体的に学校を動かし学ぼうとしているように見えた。これは私たち日本人も見習うべきことだと思う。また、授業には英語だけでなく、フランス語・日本語・中国語を扱っていたり、大学の専門資格を取得するためのコースがあった。英語を勉強するだけでも手一杯な私にとって驚くべきことであった。しかし、逆に言うと、私たちも意欲さえあれば、食欲に様々なことを学んでいくことができるということだと思う。より広い世界を見て井の中の蛙となることなく、様々な分野で挑戦して自分を高めていきたいと思える研修となった。(2年生)

・ 研修の記録

(1) 現地和歌山県人会の方々へのインタビューの様子



(2) スティーブストン缶詰工場史跡訪問



(3) インタビュー調査 スタンレーパークにて

(4) リッチモンドセカンダリースクール ——プレゼンテーション



(4) リッチモンドセカンダリースクール ——協働学修



3 ベトナム研修

・ねらいと研修プログラム

- (1) ベトナムの経済・産業、及び日本との関係について関連機関で学ぶ。
- プログラム 1 ベトナムの概要・日本との関係を学ぶ
—— 日本大使館（ハノイ）、日本総領事館（ホーチミン）
 - プログラム 2 国際協力を学ぶ
—— JICA ベトナム事務所、VJCC(ベトナム日本人材協力センター)
 - プログラム 3 ベトナム日系企業について学ぶ —— NIC ネット・ベトナム
 - プログラム 4 日本への人材派遣について学ぶ —— ミライヒューマン
- (2) ベトナムの歴史を学ぶ。
- プログラム 5 中国との関係を学ぶ —— 文廟他
 - プログラム 6 フランスとの関係を学ぶ —— サゴン大教会、中央郵便局、ドンコイ通り他
 - プログラム 7 アメリカとの関係・ベトナム戦争について学ぶ
—— 戦争証跡博物館、統一会堂他
- (3) 「総合的な学習の時間・産業」の取組を紹介するとともに、現地高校生とそれぞれの国・地域の産業について協働学修をする。
- プログラム 8 英語を用いた協働学修に取り組む —— チャンプー高校
- (4) 地域の取り組みとベトナムのつながりを学ぶ。
- プログラム 9 日高町商工会のベトナム観光客誘致事業と関連づける
—— 現地学習
- (5) 研修期間を通してコミュニケーション力を磨き、自国文化および異文化への理解を深める。
- プログラム 10 異文化の中で自らを客観視し、成長させる —— 現地研修
 - プログラム 11 事前事後研修を含むすべての研修の中で協働することの意義を学ぶ —— 日本、ベトナムにおける全研修

・日時

2019年（平成31年）1月14日（月）～1月19日（土）

・研修先

ベトナム社会主義共和国（ハノイ市、ハイフォン市、ホーチミン市、ドンナイ郡）

・事前研修、事後研修

事前研修①英語研修：夏期休暇中7回

事前研修②ベトナム概要理解、ベトナム産業調査、プレゼン準備、インタビュー準備
日高町商工会ベトナム観光客誘致事業理解、ベトナム JICA 活動理解
：7月～1月

事後研修 研修総括、プレゼン準備、報告書作成：1月～3月

・研修団構成

参加生徒：2年生5名 1年生2名 引率教員：2名

・ 研修日程

日次	月日(曜)	地名	現地時刻	交通機関	予定(宿泊地)
1	1/14 (月)	関西空港 集合 関西空港 発 ノイバイ空港着 ハノイ市内視察① 夕食、ホテル着 ミーティング・点呼	08:30 10:30 13:35 14:30 20:00 20:30	VN331 専用車	* 集合場所 関西空港国際線VN出発カウンター (ホーチミン廟/文廟/ドンスアン市場 等旧市内を中心に視察) (ハノイ市内泊)
2	1/15 (火)	集合出発 JICA事務所着 VJCC事務所着 昼食 日本大使館着 ハノイ市内視察② 夕食、点呼・ミーティング	08:20 08:50 10:55 13:10 14:35 16:30 20:00	専用車	・ JICA事務所(9:00-10:00) ・ VJCC事務所(11:00-12:00) ・ 日本大使館(15:00~16:00) ・ (チャンティエンプラザ等市内繁華街 の商業施設を視察) (ハノイ市内泊)
3	1/16 (水)	集合出発 チャンフー高校到着 チャンフー高校出発 イオンモール到着 夕食、ホテル着 点呼・ミーティング	08:00 10:10 16:00 18:00 20:00 20:30	専用車	・ チャンフー高校(10:00~16:00) ・ イオンモール (ハノイ郊外の日系商 業施設視察) (ハノイ市内泊)
4	1/17 (木)	集合出発 ノイバイ空港発 タンソンニャット空港着 昼食 NIC以外のミーティング 着 夕食、ホテル着 点呼・ミーティング	07:45 10:50 12:10 13:30 15:00 20:00 20:30	専用車 VN227 専用車	・ 日系企業視察 (15:00~17:00) (ホーチミン市内泊)
5	1/18 (金)	集合出発 日本国総領事館着 ミライヒューマン着 昼食 ホーチミン市内視察 夕食 タンソンニャット空港着	08:30 08:40 10:20 13:30 14:30 19:30 20:40	専用車	・ 日本国総領事館 (9:00~10:00) ・ ミライヒューマン (10:20~13:00) ・ (統一教会/戦争証跡博物館/ペンダン 市場/高島屋/ハッピープラザ/サイゴン スカイデッキ、ドンコイ通り等) (機中泊)
6	1/19 (土)	タンソンニャット空港発 関西空港着 解散	00:15 07:20 08:00	VN320	解散場所 関西空港国際線到着ロビー

・生徒の学び

(1) 日本大使館、日本総領事館

- ・ベトナム戦争、ボートピープルなどのベトナムの歴史から、日系企業の進出の様子や ODA の話を伺った。また、近年急速に増加しているベトナムからの労働者の問題点についても詳しく話を伺うことができ、今まで知らなかったことが見えてきた。(2年生)

(2) JICA、VJCC

- ・昔は、日本が完全にベトナムを支援するだけであったが、現在は日本とベトナムが WIN-WIN の関係をベースにした協力的な支援に変化しているという説明をいただいた。経済発展がめざましいベトナムが、このままの成長を続ければ、少子高齢化などで経済停滞が続いている日本は、将来ベトナムから逆に支援される側になるかもしれないと考えた。(2年生)

(3) チャンフー高校

- ・総合的な学習の時間で自分たちの班が作成した日本の農産物の産直店に関するプレゼンを行い、農業の魅力化についての取り組みを提案した。また、別の班が取り組んでいる地元御坊市が生産高日本一を誇るスターチスの PR のインスタグラムも紹介して、ベトナムでも広めてもらうよう英語で話した。事前に準備していたことはうまくできたが、ディスカッションでは、自分の言いたいことが即座に英語として出てこず、今までにはないやりきれなさを感じた。(2年生)
- ・英語にはある程度自信を持っていました。しかし、チャンフー高校の生徒達は、豊富な教養を持ち、それに対しての自分の意見を持ち、それを述べるネイティブ並みの英語力を持っていました。自分たちの目指すべき姿がそこにありました。(2年生)

(4) NIC メタルプロセッシング

- ・今まで海外進出している企業は、人件費が安いかどうかで決めていると思っていたが、実際には、政治的なことや災害でのリスク分散、電力などのインフラの整い具合なども大きな要因になるということも教えていただいた。現地の人は、ナット締めや溶接など手際よくたいへん熱心に仕事に取り組んでいた。ベトナムでは労働環境がよいとされている工場であるが、30 度を超える気温の中、エアコンではなく扇風機を使っているところに日本の基準との違いを感じた。(2年生)

(5) 総括

- ・ホーチミンで一緒にまわって案内いただいた日高町商工会の山田さん、荊木さんにたいへんお世話になりました。バスがミライヒューマンへの道を間違えかけたときも、即座に指示してくれ、迷わずにすみしました。また NIC メタルプロセッシングやミライヒューマンのスタッフの皆さんとも顔なじみのようで親しく話をされていました。何度もベトナムに来て、いろいろなイベントに参加され、観光客を日高町に呼び込むために交流を深めているとのことでした。今回の研修では、地元の人々の取り組みも知ることができました。(2年生)

・ 研修の記録

(1) 事前研修①

日高高校卒業生で元青年海外協力
隊員として昨年までベトナムで医
療活動に従事されていた溝口さん



(2) 事前研修②

ベトナムからの観光客誘致事業に
取り組んでいる日高町商工会の山
田会長と荊木さん



(3) JICA 研修



(4) チャンフー高校との協働学修



(5) ミライヒューマン授業



(6) NIC メタルプロセッシング



Ⅲ 調査分析

1 SGH アンケート調査

本校の SGH 事業の取組に対して、一定の評価を得るために生徒を対象に質問紙調査を実施した。調査の質問項目は 25 項目とし、「地方創生に関すること」「グローバルスキル 8 項目（本校独自）に関すること」「将来・自主的活動・自己に関すること」の 3 の柱を設定した。調査の実施回数は年 2 回とし、7 月と 2 月に実施した。調査の回答は 1「あてはまる」2「どちらかというにあてはまる」3「どちらかというにあてはまらない」4「あてはまらない」の 4 件法とし、「あてはまる」を 10 点、「どちらかというにあてはまる」8 点、「どちらかというにあてはまらない」6 点、「あてはまらない」を 4 点とし、点数化した。また、2 月の調査では、同じ質問項目について生徒自身の 1 年間の意識の変容を検証する調査も同時に行った。回答については、1 年前と現在の自分の意識を 10 段階で評価するものとした。

本校は平成 28 年度より SGH の研究指定を受けているが、指定から今年度までの 2 年間で、上記 3 つの柱に属する 25 項目において、生徒の意識がどのように変容したのかについて数量的に分析を加えることとした。分析には今年度、平成 31 年 2 月実施のアンケートの結果のほか、昨年度平成 30 年 2 月実施の「自己変容に関する意識調査」、SGH 指定直後に実施した平成 28 年 7 月実施のアンケート結果を利用する。

柱	番号	質 問
地方 創 生	1	「道成寺」や「アメリカ村」など、日高地方の歴史や伝統文化について、ある程度知っている。
	2	日高地方には世界と結びついた企業があることを知っている。
	3	日高地方の会社がどのような製品を作り、どのような経営をしているかについて、ある程度知っている。
	4	自分が住む地域（地元）に愛着を感じ、誇りに思っている。
	5	将来、できれば地元で働き生活したい。
	6	将来、地元で生活して地域の活性化に貢献したい。
グ ロ ー バ ル ス キ ル	7	自ら考えて、何事にも積極的に物事に関わろうとすることができる。
	8	新しく有益なアイデアを生み出すことができる。
	9	グループの中で、自分と他者の意見を大切にしながら、合意を形成することができる。
	10	多様な文化や価値観を尊重することができる。
	11	他者と目標を共有し、共に活動することができる。
	12	目標に向けて自分たちで計画し、適切に取組を進めることができる。
	13	自分たちの取組の過程や成果を積極的に発信することができる。
	14	自分たちの取組について、学校外の人にも理解や協力を得ることができる。
将 来 ・ 自 主 的 活 動 ・ 自 己	15	将来海外の大学等へ留学してみたい。
	16	将来国際的な仕事をしてみたい。
	17	今後の社会では世界的・国際的なものの見方や考え方が求められると思う。
	18	今後の社会では、英語によるコミュニケーション能力がますます必要となってくると思う。
	19	語学力をもっと身につけたい。
	20	グローバルな社会課題に関心を持っている。
	21	自主的に地域ボランティア等の社会貢献活動に参加したい。
	22	自主的に資格試験受験等の自己研鑽活動に取り組みたい。
	23	他者に適切に伝える工夫をしながら、人前で発表することができる。
	24	情報を収集し、ICT（コンピューター通信技術）等を活用して分析することができる。
	25	自然災害や防災に関心があり、必要な知識を持っている。

3つの柱	質問数	質問No
「地方創生に関すること」	6	1～6
「グローバルスキル8項目(本校独自)に関すること」	8	7～14
「将来・自主的活動・自己に関すること」	11	15～25

2年前と比較して、生徒の意識がどのように変化したかを見るために、上記「3つの柱」の項目ごとでの変容について検証してみる。

まず、(1)「地方創生に関する」カテゴリーにおいては、6項目中4項目でデータが上昇している。中でも第2項目「日高地方には世界と結びついた企業があることを知っている。」、第3項目「日高地方の会社がどのような製品を作り、どのような経営をしているかについて、ある程度知っている。」において、他よりも高い伸びを示している。このことは、地方創生に関する学習において、生徒の地域への理解と関心が着実に高まっていると判断できる。なお、第1項目と第4項目において低下傾向が見られるが、この項目は、低下したとはいえ、初回の調査時より高い数値を示しており、6項目中でもっとも高い数値を示している2項目であるため、地方創生に関する取組そのものが低下したことを示しているとは考えられない。

続いて(2)「グローバルスキルに関する」カテゴリーについて考察してみる。全8項目中、唯一低下を示しているのが第11項目「他者と目標を共有し、共に活動することができる。」である。この項目については、初回の調査時にはカテゴリー中で最高の数値を示している項目であり、今回の調査でも第2位の高い数値を示している。このことから(1)の場合と同様にグローバルスキル育成の取組が低下したとは判断できない。協働学修の取組が始まって間もない調査時には、「できる」と思われていたことが、取組が広がり深化した3年目には、その難しさにも気づいたため、評価が下がっていると考えられる。逆説的ではあるが、協働学修が拡大・深化していることの表れでもある。向上が顕著に表れている項目が、第8項目の「新しく有益なアイデアを生み出すことができる。」と第14項目の「自分たちの取組について、学校外の人にも理解や協力を得ることができる。」の2項目である。協働学修の研究成果のプレゼンテーション作成やプレゼンテーションの活動を通して生徒自身が力の向上を実感できていると判断できる。

(3)「将来・自主的活動・自己に関する」カテゴリーにおいては、低下している項目が3項目と他のカテゴリーに比べ多くなっているが、項目数が11項目と他よりも多いことを考慮すると、特に低くなっているわけではない。また、内容的にも(1)(2)の場合と同様、初回調査時から高い数値を示している項目において見られる傾向である。逆に高い数値を示すものとして第24項目「情報を収集し、ICT(コンピューター通信技術)等を活用して分析することができる」をあげることができるが、初回の調査において最低の数値を示したものである。探究学修においてコンピュータを用いて情報の収集、データ処理、プレゼンテーション作成などの取組の中でスキルを身につけてきたことを示している。また、他の数値が上昇している項目には、「海外へ留学する」や「国際的な仕事をする」、「社会貢献活動に参加する」、「自己研鑽活動に取り組む」などの活動が含まれ、自己を広げ、高めていきたいとの意欲の高まりが見て取ることができる。

次に先の調査と同時に実施した「自己変容に関する意識調査」を検証する調査の結果を見ることにする。この調査は、生徒個人が調査時と1年前の意識の変化をどのように捉えているかを把握するために実施しているが、先に分析したSGHアンケートと同じ質問に関する意識の変化を調査したものである。昨年の同様の調査結果と比較すると、意識の向上を示す数値が、低

くなっている項目もあるが、各学年において調査した全ての項目において意識の向上が数字に表れている。特に3年生においても変容の差異が低下していないことは、SG 課題研究Ⅲにおける論文作成への取組が生徒に探究活動の継続を促し、意識の定着をもたらしていると考えられる。

このことから、生徒それぞれが探究学修において協働学修をする中でスキルや能力を獲得できていると実感し、自らの「学び」への「気づき」が探究学修へのさらなる動機付けとなっていると考えられる。

以上の調査結果の比較分析から、生徒たちはグローバルスキルを着実に獲得しつつ、グローバルな視点を持って、社会をとらえ、自己の将来を展望する力を身につけてきていることが分かる。本校の構想原点は「日高から世界へ」であり、それは「地域に目を向け地域で活躍できるスキルを有した人材こそがグローバル人材たり得る」という仮説に基づく。平成28年度以降3年目という途中段階ではあるものの、地域課題の理解と解決に取り組む実践を通して、その理解関心に比例してグローバルスキルや自らとその将来展望に関わる意識部分に向上が見られるという結果は、本校の仮説を実証する有益な材料である。SG 課題研究Ⅰ～Ⅲ（総合的な学習の時間・課題研究を主にした活動）のために研究開発したカリキュラム的を射たものであると見て差し支えないだろう。

以上より、基軸は概ね整ったと考えられる。4年目以降は発展に向けての研究開発に引き続き取り組みたい。

SGHアンケート調査

柱	番号	数値				割合(%)				数値点数化				数値点数化平均					
		1	2	3	4	1	2	3	4	10点	8点	6点	4点	全体	3年	2年	1年	2年前	差異
地方創生	1	98	282	197	78	15.0	43.1	30.1	11.9	980	2256	1182	312	7.2	7.5	7.2	7.0	7.3	-0.1
	2	54	196	251	156	8.2	29.8	38.2	23.7	540	1568	1506	624	6.5	7.0	6.3	6.1	6.1	0.4
	3	29	197	300	130	4.4	30.0	45.7	19.8	290	1576	1800	520	6.4	6.6	6.2	6.3	6.0	0.4
	4	148	320	131	55	22.6	48.9	20.0	8.4	1480	2560	786	220	7.7	7.6	7.6	7.9	8.0	-0.3
	5	106	175	228	149	16.1	26.6	34.7	22.6	1060	1400	1368	596	6.7	6.9	6.6	6.7	6.6	0.1
	6	76	214	247	123	11.5	32.4	37.4	18.6	760	1712	1482	492	6.7	6.8	6.6	6.8	6.5	0.2
	平均													6.9	7.1	6.7	6.8	6.8	
グローバルスキル	7	58	275	275	42	8.9	42.3	42.3	6.5	580	2200	1650	168	7.1	7.2	6.9	7.1	7.0	0.1
	8	44	218	333	61	6.7	33.2	50.8	9.3	440	1744	1998	244	6.7	6.9	6.6	6.8	6.4	0.3
	9	87	385	153	27	13.3	59.0	23.5	4.1	870	3080	918	108	7.6	7.9	7.5	7.5	7.4	0.2
	10	175	366	94	15	26.9	56.3	14.5	2.3	1750	2928	564	60	8.2	8.2	8.1	8.1	8.2	0.0
	11	157	377	95	23	24.1	57.8	14.6	3.5	1570	3016	570	92	8.0	8.2	7.9	8.0	8.2	-0.2
	12	104	384	138	25	16.0	59.0	21.2	3.8	1040	3072	828	100	7.7	7.9	7.6	7.8	7.7	0.0
	13	61	297	252	44	9.3	45.4	38.5	6.7	610	2376	1512	176	7.1	7.2	7.2	7.1	6.9	0.2
	14	67	320	222	43	10.3	49.1	34.0	6.6	670	2560	1332	172	7.3	7.4	7.2	7.2	6.9	0.4
	平均													7.5	7.6	7.4	7.5	7.3	
将来・自主的活動・自己	15	100	135	172	235	15.6	21.0	26.8	36.6	1000	1080	1032	940	6.3	6.3	6.3	6.3	6.0	0.3
	16	79	143	222	202	12.2	22.1	34.4	31.3	790	1144	1332	808	6.3	6.3	6.3	6.3	6.1	0.2
	17	320	235	61	23	50.1	36.8	9.5	3.6	3200	1880	366	92	8.7	8.9	8.6	8.5	8.9	-0.2
	18	374	185	62	16	58.7	29.0	9.7	2.5	3740	1480	372	64	8.9	9.0	8.8	8.8	9.1	-0.2
	19	367	190	62	18	57.6	29.8	9.7	2.8	3670	1520	372	72	8.8	8.9	8.7	8.9	9.2	-0.4
	20	99	281	214	45	15.5	44.0	33.5	7.0	990	2248	1284	180	7.4	7.4	7.2	7.4	7.4	0.0
	21	113	274	207	46	17.7	42.8	32.3	7.2	1130	2192	1242	184	7.4	7.6	7.2	7.5	7.1	0.3
	22	133	281	187	40	20.7	43.8	29.2	6.2	1330	2248	1122	160	7.6	7.8	7.4	7.5	7.4	0.2
	23	62	235	272	69	9.7	36.8	42.6	10.8	620	1880	1632	276	6.9	7.1	6.9	6.8	6.7	0.2
	24	28	205	291	117	4.4	32.0	45.4	18.3	280	1640	1746	468	6.4	6.5	6.4	6.5	5.7	0.7
	25	81	320	198	40	12.7	50.1	31.0	6.3	810	2560	1188	160	7.4	7.6	7.3	7.3	7.2	0.2
	平均													7.5	7.6	7.4	7.4	7.3	
	平均													7.3	7.5	7.2	7.3	7.2	

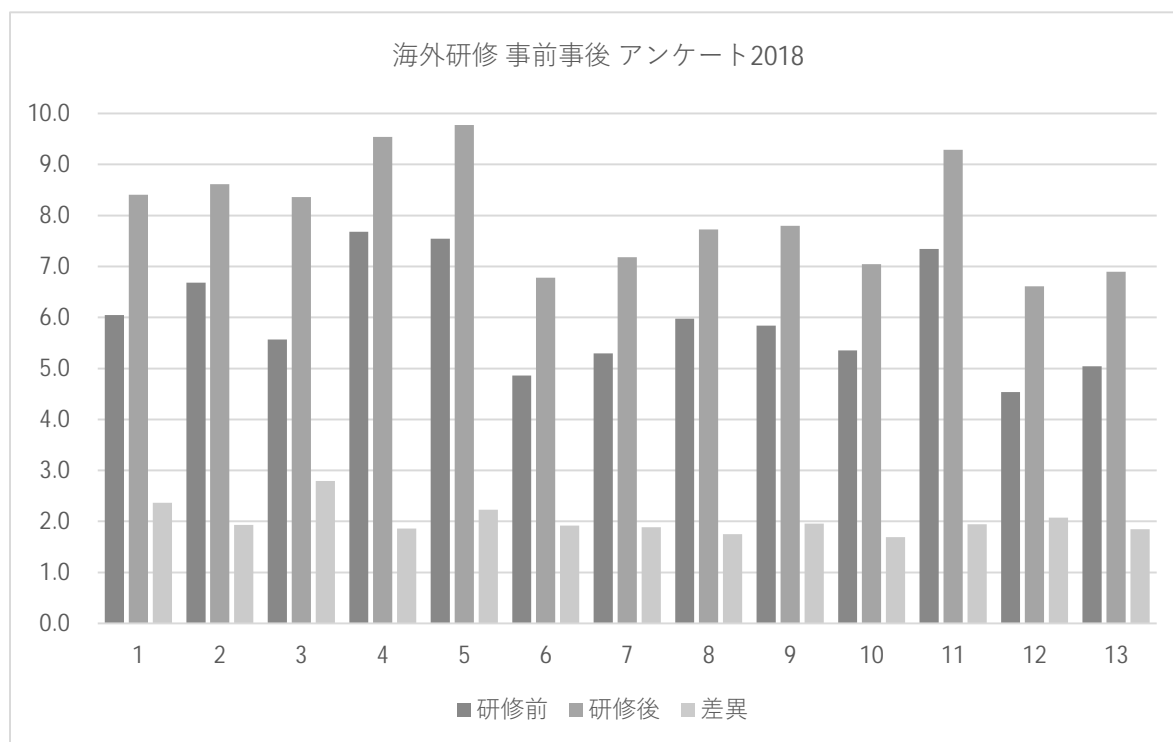
自己変容に関する意識調査

柱	番号	本年度調査											昨年度調査			増減		
		全体			3年生			2年生			1年生			全体			全体	
		調査時	1年前	増減	調査時	1年前	増減	調査時	1年前	増減	調査時	1年前	増減	調査時	1年前	増減	調査時	増減
地方創生	1	4.4	4.0	0.4	4.8	4.4	0.4	4.7	4.3	0.4	3.7	3.4	0.4	4.3	3.7	0.6	0.1	-0.2
	2	3.6	3.3	0.3	4.6	4.2	0.4	3.4	3.1	0.3	2.8	2.5	0.3	3.4	2.8	0.6	0.2	-0.3
	3	3.6	3.3	0.2	4.1	3.9	0.2	3.4	3.1	0.3	3.2	3.0	0.2	3.3	2.9	0.4	0.3	-0.1
	4	5.3	5.1	0.2	5.6	5.3	0.3	5.5	5.3	0.2	4.9	4.8	0.2	5.5	5.3	0.2	-0.2	0.0
	5	4.2	4.1	0.1	4.9	4.5	0.3	4.1	4.1	0.0	3.8	3.8	0.0	4.2	4.0	0.1	0.1	0.0
	6	4.2	4.0	0.1	4.6	4.5	0.2	4.1	4.0	0.1	3.8	3.7	0.1	4.0	3.9	0.1	0.1	0.0
	平均	4.2	4.0	0.2	4.8	4.5	0.3	4.2	4.0	0.2	3.7	3.5	0.2	4.1	3.8	0.4	0.1	-0.1
グローバルスキル	7	4.6	4.3	0.4	5.0	4.5	0.5	4.6	4.3	0.4	4.3	4.0	0.3	4.4	4.0	0.5	0.2	-0.1
	8	4.1	3.9	0.2	4.5	4.3	0.3	4.0	3.8	0.2	3.8	3.6	0.3	3.8	3.5	0.3	0.3	-0.1
	9	5.1	4.7	0.4	5.5	5.1	0.4	5.0	4.6	0.4	4.7	4.3	0.4	4.9	4.5	0.4	0.2	0.0
	10	5.8	5.4	0.4	6.1	5.7	0.4	5.8	5.5	0.3	5.3	4.9	0.4	5.5	5.2	0.4	0.2	0.0
	11	5.6	5.3	0.3	6.1	5.7	0.4	5.7	5.4	0.3	5.1	4.9	0.3	5.5	5.1	0.4	0.1	-0.1
	12	5.3	5.0	0.3	5.8	5.3	0.5	5.3	5.0	0.3	4.8	4.6	0.2	5.2	4.7	0.5	0.2	-0.1
	13	4.8	4.5	0.2	5.1	4.8	0.3	4.8	4.5	0.3	4.4	4.3	0.1	4.6	4.2	0.4	0.2	-0.2
	14	4.6	4.4	0.3	5.1	4.7	0.4	4.7	4.5	0.3	4.1	4.0	0.1	4.4	4.0	0.4	0.3	-0.1
	平均	5.2	4.9	0.3	5.6	5.2	0.4	5.2	4.9	0.3	4.7	4.5	0.2	5.0	4.6	0.4	0.2	-0.1
将来／自主的活動／自己	15	3.9	3.6	0.3	4.2	3.8	0.4	3.9	3.7	0.3	3.8	3.4	0.3	3.7	3.3	0.3	0.3	0.0
	16	3.8	3.6	0.2	4.0	3.8	0.2	3.8	3.6	0.2	3.6	3.4	0.2	3.7	3.4	0.3	0.1	-0.1
	17	6.4	5.9	0.5	7.1	6.6	0.4	6.2	5.7	0.4	5.9	5.4	0.5	6.8	6.2	0.6	-0.4	-0.2
	18	6.9	6.5	0.4	7.4	7.0	0.4	6.8	6.5	0.4	6.4	6.0	0.4	7.2	6.7	0.5	-0.4	-0.1
	19	7.0	6.5	0.5	7.3	6.8	0.5	7.1	6.6	0.5	6.7	6.2	0.5	7.4	6.7	0.6	-0.3	-0.2
	20	5.3	5.0	0.3	5.7	5.4	0.3	5.3	4.9	0.4	4.9	4.8	0.2	5.2	4.9	0.4	0.1	-0.1
	21	4.9	4.6	0.3	5.4	5.0	0.4	4.9	4.7	0.2	4.5	4.2	0.3	4.8	4.5	0.2	0.2	0.0
	22	5.3	4.9	0.4	5.8	5.3	0.5	5.2	4.9	0.3	4.9	4.5	0.4	5.3	4.8	0.5	0.0	-0.1
	23	4.8	4.4	0.4	5.3	4.8	0.5	4.6	4.3	0.3	4.4	4.1	0.3	4.5	4.1	0.4	0.3	0.0
	24	4.2	3.9	0.3	4.7	4.4	0.3	4.0	3.7	0.3	3.8	3.5	0.3	4.0	3.7	0.4	0.1	-0.1
	25	5.3	4.8	0.5	5.8	5.3	0.5	5.2	4.7	0.5	4.8	4.4	0.4	5.2	4.6	0.6	0.1	-0.1
平均	5.0	4.6	0.4	5.4	5.0	0.4	4.9	4.6	0.3	4.5	4.2	0.3	4.8	4.4	0.4	0.1	-0.1	
平均	4.9	4.6	0.3	5.4	5.0	0.4	4.9	4.6	0.3	4.5	4.2	0.3	4.8	4.4	0.4	0.1	-0.1	

2 海外研修 事前事後アンケート

質問項目

グローバルな視点	1	様々な文化圏の人々とコミュニケーションをとれる機会があれば出席したい。
	2	海外に行って、地元の人々の文化に触れたい。
	3	異なる文化の人と出会ったとき、自文化と異なっているところも尊重しようと心がけている。
	4	異なる文化を持つ人々とコミュニケーションをとるために英語は不可欠だと考える。
	5	4のために今後さらに英語の力を伸ばしたい。
グループワーク	6	自分の意見に反対する人の前でも、自分の意見を言うことができる。
	7	他の人の意見を聞いたり、議論したりすることで、自分の意見の質を高めることができる。
	8	議論の目的を達成するため、他者の意見を尊重することができる。
	9	グループワークでは、自分の役割だけでなく、チーム全体のことを考えて動くことができる。
自己の成長	10	意見が衝突したとき、複数の意見を取り入れた新しい意見を考えることができる。
	11	現状に満足せず、いろいろなことにチャレンジするのは良いことだと考える。
	12	物事の全体像をつかむために、多面的に見ることができる。
	13	困難に直面したとき、問題について粘り強く考え続けることができる。



前年との比較

		グローバルな視点					グループワークの視点					自己の成長		
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
2018	研修以前	6.0	6.7	5.6	7.7	7.5	4.9	5.3	6.0	5.8	5.4	7.3	4.5	5.0
	研修以後	8.4	8.6	8.4	9.5	9.8	6.8	7.2	7.7	7.8	7.0	9.3	6.6	6.9
	差異	2.4	1.9	2.8	1.9	2.2	1.9	1.9	1.8	2.0	1.7	1.9	2.1	1.9
2017	研修以前	5.1	5.8	5.9	7.7	7.2	5.1	5.2	6.3	6.0	5.8	7.2	5.0	4.9
	研修以後	7.8	8.0	7.7	8.4	9.2	6.3	6.9	7.6	7.6	7.5	9.1	6.8	6.6
	差異	2.6	2.2	1.8	0.6	2.0	1.2	1.7	1.4	1.6	1.7	1.8	1.8	1.8
差異	研修以前	0.9	0.9	-0.3	0.0	0.3	-0.2	0.1	-0.3	-0.2	-0.4	0.1	-0.4	0.2
	研修以後	0.6	0.7	0.7	1.2	0.5	0.5	0.3	0.1	0.2	-0.5	0.2	-0.1	0.2
	差異	-0.3	-0.3	1.0	1.2	0.2	0.7	0.2	0.4	0.3	0.0	0.1	0.3	0.1

結果分析

海外研修旅行の前後でアンケートを実施し、生徒の意識の変化について調査をした。質問項目は、(1)「グローバルな視点に関するもの」、(2)「グループワークに関するもの」、(3)「自己の成長」、合計13項目とした。回答は、1.「あてはまらない」～10.「あてはまる」、の10段階とした。

調査の結果、13項目すべての項目において意識の向上が見られるが、(1)「グローバルな視点」に関する質問に対する結果では、5項目中、第1、3、5項目において高い伸びを示している。第2項目と第3項目の前年度と今年度の差異に注目すると、第2項目と第3項目が前年度と逆転しているのは、海外研修を通して「異文化交流をする」ことから「異文化を尊重する」という多様な価値観への適応にも意識が向けられるようになってきていることの現れと考えられる。また、異文化コミュニケーションのための英語の必要性の認識や英語力向上の意欲が高まっている。

(2) 「グループワーク」に関する調査では、5項目全てにおいてほぼ同程度の伸長を示しているが、この結果は、前年度の結果とほぼ同じ傾向を示している。ところが伸長の度合いに関しては、前年度を上回っている。このことは、研修に向けた調査研究やプレゼンテーションの準備、現地での発表や生徒交流をグループで行う中で意見の隔たりを克服し、より質の高いものへと転化できた経験から得られた成果であると考えられる。

(3) 「自己の成長」の項目では、前年度とほぼ同様の傾向で、3項目とも同程度の伸長が見られる。第11項目は、研修前においても高い数値を示している。チャレンジ精神旺盛な生徒が海外研修に参加しているためであると考えられるが、研修を通じてそれがさらに高められている。その他2項目の伸長も合わせて、困難に直面した場合でも粘り強く継続して取り組む姿勢が強められ、困難に対する抵抗力が高められていることがうかがえる。研修に向けた準備として前述の調査研究活動やプレゼンテーションの準備に研修参加者が意欲的に取り組む中で力を身につけたものと考えられる。

以上の結果から、海外研修については、回を重ねるにつれて、より充実したものとなっていると考えられる。今後、海外研修をさらに「深い学び」が得られるものとするために、生徒の探究学修のテーマとそれにふさわしい研修先の選定、研修内容、現地の高校生との協働学修について検討を重ねていきたいと考えている。

3 「各科目に関するアンケート」 アクティブラーニング集計

全10科目集計

項目	評価				差異(30年度-27年度)			
	A	B	C	D	A	B	A+B	C+D
19	36.9	42.9	15.3	5.0	5.0	-2.8	2.1	-2.1
20	26.9	36.3	25.8	11.0	7.3	-2.4	4.9	-4.8
21	24.3	47.0	22.5	6.1	5.4	-0.3	5.0	-5.0
22	20.2	44.3	27.1	8.4	5.0	-0.2	4.8	-4.8
平均	27.1	42.6	22.7	7.6	5.7	-1.4	4.2	-4.2

総合的な学習の時間を除く9科目

項目	評価				差異(30年度-27年度)			
	A	B	C	D	A	B	A+B	C+D
19	34.4	43.3	16.6	5.7	6.1	-4.3	1.8	-1.8
20	25.4	37.6	26.1	10.8	6.4	-2.8	3.7	-3.7
21	24.2	47.1	22.7	6.0	6.4	-0.4	6.0	-6.0
22	20.5	43.5	28.1	7.9	6.5	0.2	6.7	-6.7
平均	26.1	42.9	23.4	7.6	6.4	-1.8	4.5	-4.5

総合的な学習の時間

項目	評価				差異(30年度-27年度)			
	A	B	C	D	A	B	A+B	C+D
19	50.4	38.2	8.0	3.5	13.2	-10.7	2.5	-2.1
20	54.5	33.0	8.3	4.2	24.6	-11.2	13.5	-13.1
21	35.5	43.3	14.4	6.8	11.9	-7.0	4.9	-4.9
22	22.2	42.8	23.5	11.5	3.6	-10.6	-7.0	7.0
平均	40.6	39.3	13.6	6.5	13.4	-9.9	3.5	-3.3

差異(総合的な学習の時間-他9科目)

項目	評価				差異(30年度-27年度)			
	A	B	C	D	A	B	A+B	C+D
19	16.0	-5.1	-8.6	-2.2	7.2	-6.4	0.8	-0.4
20	29.1	-4.6	-17.9	-6.6	18.2	-8.4	9.8	-9.4
21	11.3	-3.8	-8.3	0.8	5.5	-6.6	-1.1	1.1
22	1.7	-0.7	-4.6	3.5	-2.9	-10.8	-13.7	13.7
平均	14.5	-3.5	-9.8	-1.1	7.0	-8.1	-1.1	1.3

アクティブラーニング 質問調査項目

19	説明を聞くだけでなく、自分で考える時間が与えられている。
20	生徒同士で学び合うことができる活動が取り入れられている。
21	授業で扱ったテーマへの問題意識や関心が深まる。
22	自分で考えることの楽しさがわかり、その習慣が身についてきた。

結果分析

例年2学期末に実施している生徒による「各科目に関するアンケート」調査のアクティブラーニングに関する質問項目について分析を試みた。「各科目に関するアンケート」の質問項目22項目中、アクティブラーニングに関する質問項目は上記の4項目である。この項目はSGH指定の前年度の平成27年度より取り入れ、本年度の調査で4回目となる。回答は、A「あてはまる」、B「大体あてはまる」、C「あまりあてはまらない」、D「あては

まらない」の4件法を用いた。A～Dをそれぞれ、10点、8点、6点、4点とし、点数化し集計した。

今年度の結果と平成27年度の結果を比較すると、4項目全てにおいて「A」の回答が増加、「B」の回答が減少と、肯定的な回答がより肯定的な回答へと変化していることがわかる。さらに、「A+B」の肯定的な回答の合計を比較すると、全項目において増加している。このことからアクティブラーニングの取組がSGHの取組と共に進められているといえる。

さらに、SGHのアクティブラーニングの取組が他教科へ波及効果を及ぼしているかを検証するために「総合的な学習の時間」と「総合的な学習の時間を除く9科目」のデータを比較する。「A+B」の肯定的な回答の合計の差異に注目すると、全4項目とも平成27年度に比べ今年度のデータが上回っている。このことから、総合的な学習の時間のアクティブラーニングの要素が他教科へも波及していると言える。要因としては、総合的な学習の時間を一部の教員に任せるのではなく、多数の教員で担当していることから、その教員が総合的な学習の時間以外の授業実践で、アクティブラーニングの手法を取り入れていると結論づけることができる。

4 GTEC for STUDENTS の受験結果

(1) 2018年度受験者数

①第1回試験(7月中旬実施)

1年生全員(237名)が Basic コース

2年生全員(236名)が Advanced コース

②第2回試験(12月中旬実施)

1年生第1回試験の総合スコアが GRADE 5 以上(15名)が Advanced コース

1年生第1回試験の総合スコアが GRADE 4 以下(220名)が Basic コース

2年生全員(234名)が Advanced コース

(2) 受験結果の分析

①生徒全体の伸び率

以下の表1より、1学年においては、すべての項目において第2回目が第1回目を上回り、3つのスキルが伸長していることがわかる。昨年度との比較においても、伸び率が高くなっている。中でも、例年ほとんど変化が見られないライティングにおいてもスコアを伸ばしているところが特徴的である。しかし、伸び率が大きくなっているものの、第1回目のスコアが低かったため、第2回目のスコアは昨年度のレベルには到達していない点が課題である。

一方、2学年ではリスニングの伸び率がリーディングの伸び率を上回り、ライティングにおいてスコアを下げる結果となっているが、昨年度の2学年の結果と同様の傾向を示している。2学年は授業で、従来の週1回15分程度の定期的なリスニング演習に加えて、2017年度から学期に1度、ディスカッション、ディベートのスピーキングテストを導入している。このことによって、リスニングの力が向上してきていると推測できる。

表 1 第1回試験と第2回試験のスコア比較

2018年度		Total	Reading	Listening	Writing	2017年度		Total	Reading	Listening	Writing
1 学 年	第1回	387.0	138.0	145.5	103.5	1 学 年	第1回	422.4	152.3	160.1	110.0
	第2回	403.1	147.1	147.3	108.7		第2回	423.4	153.6	160.5	109.3
	差異	16.1	9.0	1.9	5.2		差異	1.0	1.3	0.4	-0.7
2 学 年	第1回	449.9	162.9	177.4	109.7	2 学 年	第1回	457.8	167.7	176.4	113.7
	第2回	465.3	170.0	186.2	109.1		第2回	484.6	177.8	193.2	113.6
	差異	15.3	7.1	8.8	-0.5		差異	26.9	10.2	16.8	-0.1

②海外研修を経験した生徒の伸び率

2018年度に海外研修をした生徒と参加しなかった生徒のスコアを以下の表2に示している。2年生においては、リーディングとリスニングの伸びが非参加者の結果を遙かに上回っている。ところが、ライティングに関しては逆の傾向を示している。一方、1年生においては、リーディング、リスニング、ライティング全てにおいて参加者の伸びが非参加者の伸びを下回る結果となっている。

2年生に関しては、研修に際して、協働学修に向けた調査、まとめ、プレゼンテーションの準備などでリーダー的な役割を負い、英語を使いながら主体的に活動したことでスキルの伸びが生まれてきていると推察できる。1年生については、探究学修そのものにも不慣れなことが多く、研修の準備段階においても日本語主体の活動が多かったことも要因として考えられる。今後、研修に向けた事前研修や準備において、より英語に接する場面を創出していく必要を感じる。

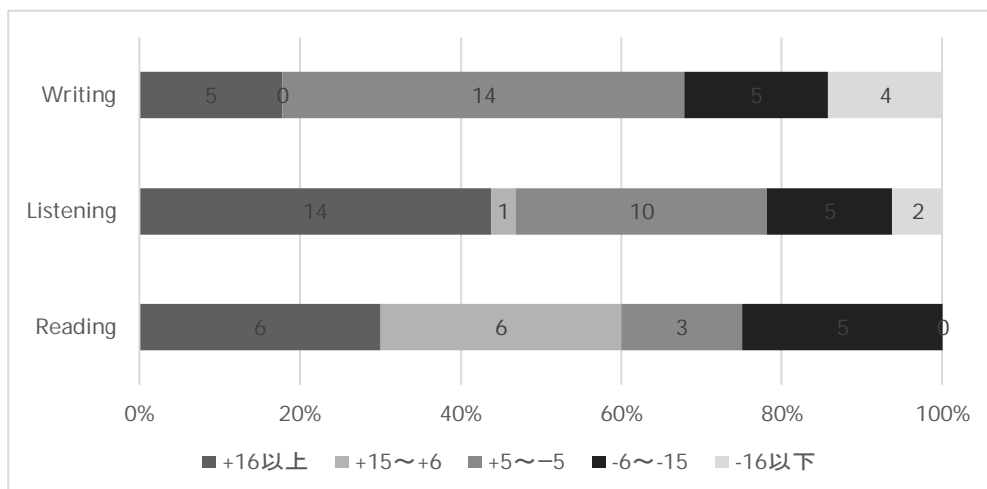
表 2 研修参加者と非参加者のスコア比較

2年生		Total	Reading	Listening	Writing	1年生		Total	Reading	Listening	Writing
第 1 回	全体平均	449.9	162.9	177.4	109.7	第 1 回	全体平均	387.0	138.0	145.5	103.5
	研修参加者	487.6	169.7	199.3	118.6		研修参加者	434.9	156.9	171.5	106.5
	非参加者	446.5	162.3	175.4	108.8		非参加者	384.6	137.1	144.2	103.3
第 2 回	全体平均	465.3	170.0	186.2	109.1	第 2 回	全体平均	403.1	147.1	147.3	108.7
	研修参加者	519.5	180.8	221.6	117.2		研修参加者	450.8	165.5	169.7	115.6
	非参加者	460.2	169.0	182.9	108.4		非参加者	400.7	146.2	146.2	108.3
差 異	全体平均	15.3	7.1	8.8	-0.5	差 異	全体平均	16.1	9.0	1.9	5.2
	研修参加者	31.9	11.1	22.3	-1.4		研修参加者	15.9	8.5	-1.8	9.2
	非参加者	13.7	6.7	7.5	-0.5		非参加者	16.1	9.0	2.0	5.0

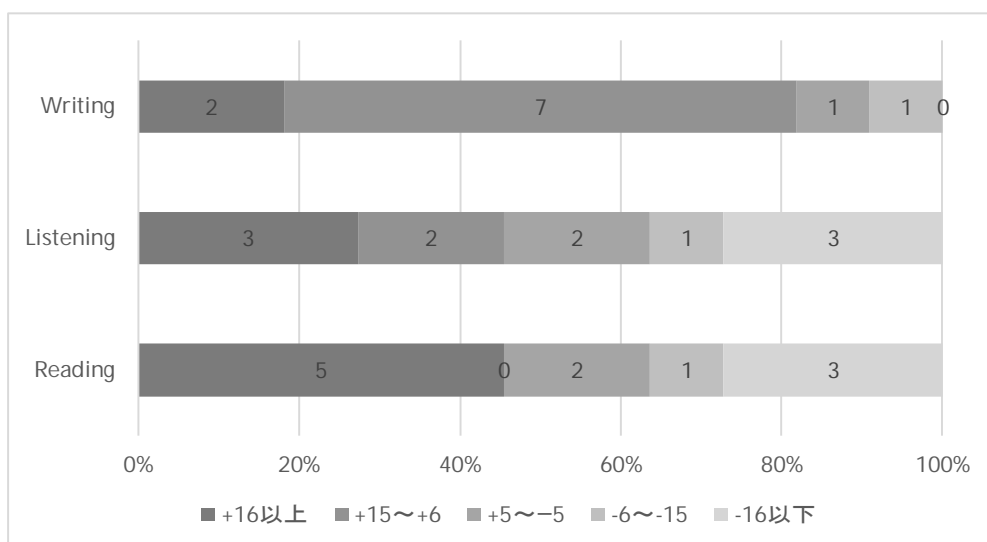
以下の図1では、研修参加者のスキル別のスコア推移を示している。2年生参加者の総合スコアの伸びが非参加者を大きく上回っているが、スキル別に見てみると、リスニング、リーディングの順にスコアを伸ばしている。一方、1学年参加者においては、リーディングの伸びが最も大きく、次いでリスニングの順となっている。これらのスキルは、日常の英語の授業での積み重ねと、準備段階を含めた海外研修での英語使用の経験を通して一層強化されたものである。いずれの学年にも共通するライティング力向上の課題についても、今後、英語の授業だけではなく、各種研修においても意識的に「英語で書く」機会を数多く設ける取組が必要である。

図1 研修参加者の GTEC スキル別スコアの推移

2年生



1年生



IV 交流活動

1 姉妹校交流

(1) 中国（西安中学）

①交流の経緯

2006年1月に本校が初めて外国の学校と姉妹校提携を結んだのが中国陝西省西安中学である。きっかけは、本校生徒の中国留学であった。中国がそれまでの短期留学に加えて、初めて長期留学生を受け入れた3名の中に西安中学に派遣された本校生徒1名がいた。その生徒の勤勉さを通して、本校が姉妹校として選ばれたという経緯がある。

調印後は年に一度の相互訪問を続けている。2018年の今年は、姉妹校交流が始まって12年目、西安からは6回目の訪問の年となる。

②交流日程と訪問団構成

- a 2018年（平成30年）7月4日（水）～7月8日（日）の5日間
- b 西安中学の高校生10名（男子2名、女子8名） 引率4名
- c 日程概要

日次	月日	時間	場所	内容
1日目	7/4 (水)	16:30 18:00	移動	訪問団、関西国際空港に到着 訪問団、日高高校に到着 ホストファミリーと合流し、各家庭に帰宅
2日目	7/5 (木)	1限 2限3限 6限7限 放課後	校内	歓迎集会 校内案内 授業（中学校英語） 授業（2年英語、2年古典） 生徒交流会
3日目	7/6 (金)	午前 午後 放課後	校内 校外	授業（中学校英語、1年英語） 道成寺絵解き説法 部活動見学
4日目	7/7 (土)		家庭	ホストファミリーと交流
5日目	7/8 (日)		移動	お別れ

③交流内容及び成果

ホームステイや学校生活を中心とした交流が中心であった。家庭への受入については生徒や家庭ともに少なからず不安はあったようだが、日程終了後の感想には「受け入れてよかった」「受け入れたことで家族間の会話も増えた」等の肯定的な意見が際立った。

校内においては授業や交流会の中で、のべ 320 人の生徒が直接的に交流機会を持つことができた。普段の学校生活を送る中で国際交流の機会を得られることが、訪問団受入に伴う利点である。今後もこの姉妹校関係をグローバル教育に生かしていきたい。

④生徒所感

私は、ホームステイで生徒を受け入れることに初めは迷いがありました。家族に協力してもらわないといけないし、自分の英語が伝わるのか、相手の言いたいことが理解出来るかどうか不安だったからです。しかし、私はホストファミリーになることを決めました。一つ目の理由は、従姉がデンマークの生徒を受け入れたことがあったからです。その子と交流をしたときにとっても楽しい時間を過ごせたので、私も受け入れたいと思うようになっていました。もう一つの理由として、国際交流に興味があったからです。その国の伝統や文化、生活様式、学校生活などが知れると、その国に対しての知識が得られるし、英語力を高めることが出来るからです。

受け入れが決まってからも、食事は合うのか、お風呂の入り方、どこに連れて行ったら良いのかなどたくさんの事を家族と一緒に考えました。初めは一人の予定だったのですが、二人の生徒を受け入れました。結果、二人の方が中国の生徒にとって緊張せず、リラックスして過ごせたように思います。大変だった、困ったということは一切無く、二人とも優しくて本当に良い生徒たちでした。彼女たちは別れる際、私に手紙をくれました。その手紙を読んで、私は心から嬉しい気持ちになりました。またそれと同時に、もうお別れの日なのかと少し悲しい気持ちにもなりました。

今回、受け入れをして本当に良かったと思います。私の中国に対する見方が少し変わりました。何より、彼女たちと良い日々を過ごせました。学校での慌ただしい交流とは違って、ゆっくりじっくり会話をする事が出来て、お互いの考えや、思いをきちんと伝えられました。私にとっても、家族にとっても良い経験となりました。(2年生)



⑤交流の様子

(1) 歓迎式典



(2) 授業交流



(3) クラブ交流



箏曲部

弓道部

(4) 生徒交流会

(2) デンマーク（フレデリクスハウン高校）

①交流の経緯

本校が位置する和歌山県中部は、紀伊水道に面し、古くから水上交通の盛んな地域であった。半世紀ほど前、遭難した漁民を助けようとしたデンマーク人の機関長が嵐の海で殉死した。地域の住民はこの勇気ある行動をたたえ、救命艇を保管し、顕彰碑を建立して次世代へと語り継いできた。フレデリクスハウン市はこのクヌッセン機関長の生地である。

日高高校は 2010 年からフレデリクスハウン高校と交流を行い、隔年に訪問団を派遣し、交流と協働学修を実施している。最近の数年間は、環境やエネルギーといった自然科学的なテーマを設定して学びを深めてきた。今回は、それに加えて「持続可能な発展」のテーマをこちらから提案し、実施した。

②日程と訪問団構成

a 日程概要 2018 年（平成 30 年）9 月 30 日（日）～10 月 6 日（土）

Time:	Monday (1/10)	Tuesday (2/10)	Wednesday (3/10)	Thursday (4/10)	Friday 5/10)
8.15-9.00	Welcome 232	Excursion to "Råbjerg Mile" and "Grenen".	2 nd working session 232	4 th working session 232	Departure by bus at 7:00 at Frederikshavn Gymnasium. Arrival at Aalborg Lufthavn at 8:00 pm
9.00-9.45	(start at 8.30)				
9.55-10.40	2.k Chemistry (OP)/ 2.s Sports (MO)	Departure from Frederikshavn Gymnasium 8.30.	Visit the Major (Townhall) 11.00-12.00	2.a Social science (Br) 116	
10.45-11.30	3.c English (LF)/ 2.s Sports (MO)	Expected return at Frederikshavn Gymnasium 15.00.	Lunch	Lunch	
11.30-12.00	Lunch		3 rd working session 232	5 th working session 232	
12.00-12.45	1 st working session 232	Visiting Johannes Knudsens House and grave	1.g Art (SW) 152	3.u Biology (Ak) 232	
12.50-13.35			"Hygge" 232		
13.45-14.30					
14.35-15.20					

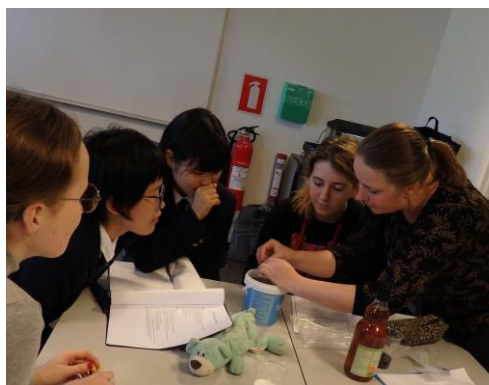
b 参加生徒 1 学年 4 名（女子 4 名）、2 学年 6 名（女子 5 名、男子 1 名）計 10 名
引率教諭 2 名

c 交流内容及び成果

今回のデンマーク訪問は、以下のことを目的として実施した。

- 1 「持続可能な発展」の先進国であるデンマークから、その先進的な取組と価値観を学ぶ。
- 2 課題を解決するために、自主的に計画を立て、様々な活動を通して、参画力、コミュニケーション力、企画力を伸ばす。

目的1について、訪問を通して学ぶべきことを事前研修で整理し深めておくことにした。デンマークの「持続可能な発展」の基礎をなすものとして、生徒たちは「福祉制度」「教育」の2つのテーマを選び、日本とデンマークの違いと現地で学びたいことをまとめ、グループ内で発表とディスカッションを行った。調査は書籍やインターネット等が主な手段となったので、制度的な事柄が主になった。日本の制度についても、現地の高校生に興味を持ってもらえるよう、発表内容を整理し



プレゼンテーションを作成した。訪問生徒の中で、自分たちの福祉や教育制度についての知識と関心が深まり、ホストファミリーともこれらのテーマで話げできたことが生徒の事後レポートから読み取れる。同時に、デンマークの生徒らが自国の福祉と教育の制度についてどのように考えているかを肌で感じる事ができたようである。

目的2について、引率教員は研修内容についての助言を行う程度で、事前研修の実施、事後の校内レポート作成と発表会の段取り等をほぼ生徒たちに任せた。初期の段階ではなかなか自分たちで話し合って進めることが難しく、教員がファシリテートしなければならない場面もあったが、テーマが確定した頃から、自分たちで役割を分担し、調査内容の報告時にお互いに疑問をぶつけ合うなど、積極性とコミュニケーション力が高まった。

また、英語でのコミュニケーション力については、参加者は他の海外研修参加者ととも計7回の英語研修を受講した。加えて直前の週は昼休みに各自昼食を持って集まり、外国人教員や英語科教員とともに英語でのコミュニケーションを練習する機会をもった。しかし事後レポートでは、英語に自信があったであろう生徒ですら、実際に現地に行ってみると思うように英語が通じなかったり、英語以前にどうすれば円滑にコミュニケーションをとれるかわからなかったりした経験について述べている。これはこれで貴重な体験であり、この経験をそれぞれの今後の課題解決に生かしてくれればと考えている。

現地での協働学修は、姉妹校の担当教員が非常に興味深いテーマを設定してくれており、小グループで実験と考察を行い、最終は結果を全員の前で報告するというスタイルをとった。最終の目標に向けて、両校の生徒は協働して課題に取り組んだ。自主性、参画力、コミュニケーション力が不可欠な課題である。そこに学校教育について考え方の違いも加わって、生徒にとっては本当に得がたい経験となった。



2 海外研修受入

姉妹校訪問団以外で、今年度海外訪問団受入機会は計3回であった。概要は以下の通り。

日 時	2018年6月13日(水)
訪問団概要	(国・地域) 中国 (学校) 白城毓才実験学校 (構成) 教員とその家族 36名
内 容	9:30 到着 9:45 学校概要説明 10:00 授業参観 11:00 出発

日 時	2018年12月5日(水)
訪問団概要	(国・地域) 台湾 (学校) 國立臺東高級商業職業学校 (構成) 生徒21名 引率4名
内 容	11:00 到着 11:25 歓迎集会(体育館) 12:00 昼食交流(会議室) 午後 授業交流(1学年C英I、物理基礎、現代文、家庭) 放課後 部活動交流(箏曲部、弓道部) 17:00 出発

日 時	2019年3月15日(金) 10:00~17:00
訪問団概要	(国・地域) ジョージア州 (団体) ブルックハイブン・イノベーション・アカデミー(同州ノースクロス市) セントマーティンス・エписコパル・スクール(同州ブルックハイブン市) (構成) 高校生18名 引率5名
内 容	10:00 到着 午前 授業参加(1学年英語表現)、実習参加(2学年調理実習) 昼食交流 午後 生徒交流(地域紹介) 放課後 部活動参加(箏曲部、茶道部) 17:30 出発

12月の受入は、二週間後に台湾修学旅行を控えていた1学年にとって非常によい機会となった。英語交流や折り紙等を用いた文化交流の他に、台湾の習俗に関するクイズを取り入れて交流をもったクラスもあった。偶然ではあるが、年間行事に組み込まれていない形の事前研修が実現した。外部からの受入要請と本校の行事計画が上手く噛み合うことは稀であるが、今後ともできるだけ実のある交流機会を提案していきたい。



3 アジア・オセアニア高校生フォーラム（7/24～7/27 於：和歌山市）

現在県教育委員会が国内外からの高校生を招聘して開催しているこのフォーラムは、2014年に日高高校創立100周年記念事業として開催したものが発展したものである。4日間の行程では、分科会、全体会の発表のほか、各国の紹介や世界遺産研修ツアーなどを通して、各国生徒と交流することができた。今年度は『「世界津波の日」2018 高校生サミット in 和歌山』が本県主催で行われることから、「津波」のカテゴリーが例年より多く、「津波A」「津波B」「環境」「観光・文化」「教育」の5つの分科会に分かれた。本校からは2年生3名が参加し、「津波A」の分科会において発表を行った。”Disaster



Prevention in HIDAKA”と題し、近い将来南海トラフ地震とそれに伴う津波などの大規模災害が起きた際に、日高高校を避難所として運営するための日高高校独自の「避難所マニュアル」を作成した。「日高高校生ができること」をテーマに本校生徒の視点から、自分たちが率先して行うこと、何が重要であり、どんな役割を果たせるかについて論じた。また、全体会では分科会で発表したことをまとめ、英語で発表し、オーディエンスと共にディスカッションを行った。ここでは、日高高校生からの視点のみで考えられていた防災マニュアルが、国内外の生徒・教員などの意見を取り入れることにより、さらに細やかなところまで配慮したマニュアルを作成するための多くの意見を聞くことができた。全体会では司会も担当し、円滑な進行に貢献した。さらに、開会式では日本の生徒を代表し、カンボジアの生徒と共に堂々と開会宣言を英語で行った。



4 「世界津波の日」2018 高校生サミット in 和歌山

(1) 全体会

1. 開催概要

開催日	2018年（平成30年）10月31日（水）～11月1日（木）
会場	和歌山ビッグホエール他
主催	和歌山県、和歌山県教育委員会、広川町、広川町教育委員会
共催	国連国際防災戦略事務局（UNISDR）駐日事務所
後援	国土強靱化推進本部、内閣府政策統括官（防災担当）、外務省、文部科学省、国土交通省、気象庁、経済協力開発機構（OECD）、東アジア・アセアン経済研究センター（ERIA）、国立大学法人 和歌山大学、JICA
参加者	487名 海外参加者 300名（48か国）国内参加者 187名（49校）

*参照「世界津波の日」2018 高校生サミット in 和歌山 HP

<https://www.tsunami2018wakayama.telewaka.tv>

2. 「世界津波の日」2018 高校生サミット in 和歌山 日高高校の取組

① 事前学習

校内・県内の選考を経て、日高高校より大会議長1名（全体2名）、総合司会1名（全体2名）、分科会司会・発表者3名の5名が参加することになり、大会の重要な役割を担うことになった。

1学期当初より大会議長（3年生）、総合司会（2年生）は主催団体の和歌山県、和歌山県教育委員会と連携しながら、サミットの和歌山開催の意義や果たすべき役割についてより明確なビジョンを作り上げ、英語力向上にも取り組んできた。また、発表者の3名（全員2年女子）も、校区内の市町村の防災課を個別に訪問し、担当者からそれぞれの自治体の取り組みや課題を伺うと同時に日高高校（1、2年生全員）・日高高校附属中（3年生）に防災に関する意識調査（アンケート）を実施し、分科会の発表に向けてほぼ毎日放課後、その結果をまとめ、課題を見出し、自分たちのプランを考案した。

一方、主催の和歌山県、和歌山県教育委員会は県内の全参加高校生を対象に、事前学習会を2回（8月3日、8月7日）開催し、濱口梧陵の地元広川町の「稲むらの火の館」等で実地研修や英語での効果的なディスカッションの研修を行い、フォーラムに向けて知識や技能を高め、親睦を深めた。さらに県内すべての高校が自己紹介と海外の参加校に向けての応援ビデオメッセージを作成してHPにアップした。

② 「稲むらの火祭り」（広川町）参加

10月28日（日）濱口梧陵ゆかりの広川町で稲むらの火祭りが開催され、海外生徒全員が地域の一般参加の人々と一緒に参加した。日高高校の5名も参加し、海外学生に合流した。火祭りは、安政南海地震の時、濱口梧陵が稲むらに火をつけて住民を高台に導いた故事に由来するもので、当日は、灯油を染み込ませたタオルを巻いた長さ約1メートルのたいまつに火を付けて、廣八幡神社までの道のり約2キロを歩き、故事を追体験した。道中に用意された大きな稲むらが火で燃やされると、幻想的な風景が広がり、参加者は感銘を受けた。

③ 日高高校防災スクール参加 【詳細は別項目に記述】

④ 「世界津波の日」2018 高校生サミット in 和歌山 参加

《第1日目 10月31日(水)》

12:45～13:35 開会式

14:20～14:35 記念植樹・記念碑除幕式

14:55～16:35 分科会

第1日目の和歌山ビッグホエールでの開会式は、高校生議長の開会宣言で始まり、各国からの参加者紹介、仁坂和歌山県知事の挨拶が行われた。その後、10月28日に行われた稲むらの火祭り、29日、30日のスタディツアーとして日高高校で行われた防災スクールの様子や耐久高校、串本古座高校での研修の様子が海外参加者の代表より紹介された。次に、会場を屋外に移し、各国と日本の高校生が共同で記念植樹とサミットの記念碑除幕式も行われた。その後、再び会場を和歌山ビッグホエールに移し12会場に分かれ分科会が行われ、各校の発表、質疑応答で活発な議論が続いた。

《第2日目 11月1日(木)》

9:30～12:00 分科会

13:00～14:00 津波防災講演会(東京大学大学院情報学環 片田敏孝 特任教授)

14:20～16:50 総会・閉会式

第2日目は、初日に続き、分科会が行われた。日高高校は、分科会司会も務めながら **Raising awareness of disaster prevention～Let's make our networks** ～と題したプレゼンテーションを行った。地域調査や全校生徒へのアンケートより、学校や地方自治体は単体として防災対策に力を入れているが、相互間の連絡や連携が不十分で、高校生がリードしていろいろな団体や組織が入った地域ネットワークを作ることが必要であり、さらにそのネットワークを世界規模に広げれば大きな防災の力になれるという提案であった。その後、分科会でフォーラムの宣言に向けて、グループで意見を集約した。それを受けて、議長はじめ各グループの代表者で会議を行い、宣言文をまとめ、発表に向けての準備を行った。午後は、東京大学の片田特任教授の東日本大震災の教訓をベースにした防災意識に関するご講演をいただき、地元高校生のアトラクションが続いた。総会では広川町長の挨拶、安倍首相のビデオメッセージ、「世界津波の日」の提唱者の二階衆議院議員の挨拶で始められ、各分科会で話し合われたことが報告された。そして、最後には本サミットで作上げられた「稲むらの火宣言」が議長より提案され採択された。フィナーレは稲むらの火にちなみ、館内の照明を落とし、全員が電灯トーチを持ち、幻想的な世界を作り、濱口梧陵の教えを世界中に広めていくことを誓い合って閉会となった。



3. 参加生徒感想

議長を務めるにあたって、私は、このサミットにおいて達成したい目標が3つあった。

1つ目は、「世界津波の日」制定の礎となった『稲むらの火』の逸話と濱口梧陵さんの功績を、全世界に向け発信することだった。過去2回のサミットでは、なかなか全ての参加者に知ってもらうことはできず、もやもやした気持ちを抱えていた。しかし、今回のサミットプログラムでは、稲むらの火祭りへの参加や、稲むらの火の館の訪問、宣言文、クロージングアトラクションでの演出など、至る所に『稲むらの火』の内容が盛り込まれていたため、参加者だけではなく、日本国内、そして世界にも大きくPRできたように思う。海外参加者へのインタビューがニュースで放送されていたが、その中でも、その生徒は「稲むらの火の逸話がとても印象に残っており、自分の国も濱口梧陵さんの行いを手本とした」と話していて、私はとても嬉しくなった。和歌山が誇る偉人である濱口梧陵さんのことが、今回をきっかけに世界中に広まり、そのおかげで将来災害が起こった時に少しでも犠牲者の数が減らせればよいと思う。

2つ目は、過去2年間（高知、沖縄）で経験したことを活かして、リーダーシップを発揮することだった。実際、サミットではスムーズな進行ができた。また、事前研修では積極的に質問をしたり、前に出て発表したりして、周りの人の手本になるように努めた。

3つ目は、英語力を伸ばすことだった。高知県で開催された最初のサミットでは、自分の英語力に絶望した。その苦い経験を経てより熱心に英語を勉強するようになり、また議長として英語が拙いと申し訳ないと思い原稿を読む練習をしっかりとしたためかは分からないが、今回のサミットではあまり英語には困らなかつたように思う。閉会式のクロージングで行った議長のコメントはほとんどアドリブだったので緊張したが、2年前の私は、まさか自分が即興で英語のコメントを言えるようになっていたことは予想だにしなかつたと思う。それほど、今回のサミットは自分の英語力の成長を感じられる経験であり、自信につながった。

そして今回は、サミット以外にも様々な経験をすることができた。東京の各省庁への訪問や記者会見などだ。初めは本当に緊張して、胃が痛くなったり、頭の中が真っ白になったりしていたのだが、徐々に慣れてきて、サミット後の省庁訪問の時には全く緊張しなくなっていた。多分、後にも先にも、これほど緊張することは今後ないと思うので、「省庁訪問や記者会見の方が緊張する。」と思えば何だって乗り越えられそうな気がする。

また、今回のサミットを通して、私は、目標を達成するだけでなく、新たな課題や目標を見つけることができた。

まず、将来の夢をより具体化できた。私は、第1回サミットの後に防災教育や災害対策分野での国際協力に興味を持った。これまでぼんやりとそう思っているだけだったが、今回のサミット閉会后、UNISDR（国連国際防災戦略事務局）の職員で、インドネシアでのジャカルタシンポジウムからお世話になっている方に、「将来、防災分野に興味があるならインターンシップに来てね」と言ってもらえた。国連で働くというのは夢のまた夢で実現できるかわからないが、大学在学中にはUNISDRでインターンシップをしてみたいと思う。

次の計画は、サミットが終わった後も、参加者の間で意見交換をしたり、アクションプランを実践している様子を発信したりできるようなコミュニティーを作ることだ。現在のところ、サミット参加者の個人同士での交流にとどまっている。サミットで発表したこと

や学んだことを地元のコミュニティにどのように還元しているのかなどを共有することができれば、より若き津波防災大使の間で防災意識は高まっていくと思うし、地域のためにもなるので、そのような場を設けられたらいいと思う。また、同様に、これから先、若き津波防災大使としてサミットに参加する可能性のある人に対する情報発信をする場も設けたい。サミットはどんな感じなのか、過去のサミットではどのようなことを学んだのかなどの経験を私たちが発信し、このイベントに興味を持ってもらえれば、その人たちの防災意識も高めることができると思う。「サミットを開催して終わり」ではなく、サミット開催後にもそのように継続的に取り組める、フォローアップのようなものがあるのもいいのではないかと感じたので、これから企画して、実現させたい。(3年生サミット議長)

4. 成果と課題

48 か国の高校生が、「世界津波の日」制定ゆかりの地、和歌山に集ってそれぞれの国・地域での防災についての活動を発表し、討論し、稲むらの火宣言を作り上げた意義は、和歌山だけでなく世界にとっても大きいものがある。和歌山のすべての高校が参加して、事前に海外の高校生に向けて歓迎ビデオを作成してHPにアップしたり、歓迎式典のパフォーマンスや、会場案内などをしたりしてサミットを盛り上げた。議長の感想にもあったように、サミットに直接触れる機会を持てたことは、今後の彼らの生き方にも影響を与えたものと思われる。また、国内外の生徒のほとんどがSNSなどのネットワークを通して、サミットの様子を発信しており、まさに世界を巻きこんでいくサミットであった。

本校の参加者に「このサミットの取り組みを通してどんな力がつきましたか。5つあげてください。」という問いに全員が「積極性」と「アドリブ力」、「臨機応変力」、「はつたり力」など即座に判断し対応できる力をあげていた。また、ほぼ全員が「リーダーシップ」「忍耐力」「協調性」などの集団の中での学びで必要な力をあげ、「コミュニケーション力」「英語力」などが続いた。これらの力は、今後グローバル化が急速に進展していく社会に求められるもので、現在の学校教育の枠組みの中では十分に涵養していく機会が少ない現状を考えると、このような取り組みが今後の大きな一つの指針となる。

大会議長を務めた生徒は、1年次よりこのサミットに参加するだけでなく、カナダやインドネシアでの海外研修や、OECD 日本イノベーション教育ネットワーク主催で、東京で行われた生徒国際イノベーションフォーラムでも大会宣言をまとめ、発表した経験を持つ。彼女は様々な研修やイベントに参加するごとに、課題を見つけ成長してきた生徒である。今回のサミットの規模にまでいかなくとも、校内で、地域で、県内で身近なところからでも、このようなイベントや研修の機会を多く開催し、生徒たちが繰り返し参加できる場をいかに作っていくことができるかが今後の課題である。

(2) スタディツアー

1 実施概要

開催日	2018年(平成30年)10月29日(月)
場所	和歌山県立日高高等学校
参加者	約1,600名(高校生701名、中学生119名、保育園2園計121名、幼稚園2園計93名、小学校1校335名、地域住民20名、教職員61名、海外生徒等150名、他)
協力団体	御坊市消防署、御坊市役所市民福祉部防災対策課、美浜町防災企画課、道成寺、日高振興局総務県民課、和歌山県情報化推進協議会防災研究部会(NHK和歌山放送局、和歌山大学、エフエムワカヤマ、共同通信)、紀州新聞社、御坊警察署
実施内容	地域合同避難訓練および防災スクール <世界津波の日2018高校生サミット in 和歌山スタディツアーと共同開催> (地震避難訓練、津波避難訓練、DVD学習、心肺蘇生法、パーティション組み立て撤去、搬送法・応急手当、煙体験、消火訓練、避難所運営ゲーム(HUG)、非常食炊き出し配膳訓練、臨時災害放送運営訓練)

2 事前の取組

- ・以前から各園や近隣の小学校・地域住民は、地域の避難場所と指定されている本校に避難する訓練をそれぞれ独自で取り組んでおり、本校も独自に地震・津波避難訓練を計画・実施してきた。これまで別々だった避難訓練を合同で行うことにより、より実際に即した形での避難訓練となり、本校及び地域の防災・減災教育につながることから、本校が地域の関係各所に呼びかけ、計画・実施した。本年度4回目を迎える。
- ・事前に中学1年生から高校3年生にLHRの時間を活用し、本校の防災についてのあり方や考え方、過去の地域合同避難訓練および防災スクールの反省や課題等の学習を実施した。
- ・世界津波の日2018高校生サミット in 和歌山スタディツアー(海外生徒24か国25グループが参加)実施のため、本校担当教員・担当生徒が関係団体(日高振興局、御坊市消防署)に事前指導・研修を受け、海外生徒に対応するため英語での説明を準備した。
- ・FM放送機材を用いた臨時災害放送局設置及び運営訓練のため、本校が和歌山県情報化推進協議会防災研究部会、御坊市役所防災対策課と協力し、開設に向けての事前研修90分を3回行い、本番に備えた。研修内容は、NHK大阪のアナウンサーの方から講義、紀州新聞社・共同通信の記者の方から原稿の書き方、NHK和歌山放送局アナウンサーの方からアナウンス時の諸注意等について等の研修を行った。

- ・高1・2年生国際交流委員とボランティアを対象として、校外ツアーの事前研修を行った。研修では、美浜町松原地区津波避難場所に行き、美浜町職員から避難場所建設の経緯、そして各設備の説明を受けた。また、校外ツアー実施にむけて、発表の役割分担、英語での原稿作成、そして発表のリハーサルを行った。

3 主なプログラム

想定は、南海トラフの地震発生、和歌山県内に大津波警報発令とし、10:30に地震発生、避難開始で参加団体と統一した。本校生徒(中高生)及び海外高校生は、グラウンドに集合(地震避難訓練)後、校舎3階以上へ垂直避難(津波避難訓練)した。各4園と小学校・地域住民はそれぞれの避難経路を通り、各施設から本校3階以上の指定場所へ避難した。各4園に高校生3~6名を派遣し、各園の避難訓練に参加した。実際の訓練の様子を園児達とともに体験することで、生徒たちの防災や減災に対する意識の高揚を図り、災害における知識・判断力・行動力を養うことを目的として受け入れて頂いた。地域避難訓練では、各所で御坊警察署に交通整理を、防災スクールでは御坊市消防署のご協力のもと実施した。

避難訓練終了後、防災スクールを実施した。その内容は、中1と高1がDVD学習、中2が心肺蘇生法体験、中3と高3が避難所運営ゲーム(英語版HUG)、高2がパーティション組立撤去体験、搬送法体験、煙体験、消火訓練、非常食炊き出し配膳訓練、臨時災害放送運営訓練である。心肺蘇生法体験、搬送法体験、煙体験、消火訓練は御坊市消防署の皆様にご協力頂いた。非常食炊き出し配膳訓練では、高校生が非常食(アルファ米)で約1,000個のおにぎりを作り、本校生徒と海外生徒に配膳した。また、地域住民の方から本校生徒に避難運営ゲーム(HUG)のレクチャーをして頂いた。

臨時災害放送運営訓練では、事前にNHK大阪放送局の住田功一氏を講師に迎え、「災害時、ラジオはいかに威力を発揮したか」という演題で阪神淡路大震災時での体験談をお話し頂いた。さらに、NHK和歌山放送局のアナウンサーや新聞社(紀州新聞社、共同通信)の記者の方々、御坊市役所防災対策課の皆様にもご協力頂いて事前研修を行って本番に備えた。訓練当日は、御坊市防災対策課から御坊市の被災情報等を本校生徒が取材し、臨時FMで地域に呼びかけ、壁新聞を作成し、情報を地域に広める訓練を行った。

校外ツアーでは、道成寺と美浜町松原地区津波避難場所で行った。和歌山県最古の寺である道成寺では、本校生徒は主に海外生徒たちのアテンドを行い、宝仏殿を拝観し、縁起堂では住職から英語の絵解き説法を聞いた後、境内、本堂などを拝観した。美浜町松原地区津波避難場所では、美浜町長と美浜町語り部ジュニアによる歓迎のあいさつの後、本校生徒が海外生徒に対して、避難場所建設の経緯や備蓄倉庫、マンホールトイレ、かまどベンチの説明を英語で行い、マンホールトイレ、かまどベンチの組立て体験も行った。

4 参加者感想文

【地震・津波避難訓練】

- ・海外生徒を含む避難訓練はとても難しく感じた。放送後すぐ机の下に隠れ自分の身を守った。しかし思っていた以上に地震が長く、実際にもこんな風になるのだなと感じた。海外生徒はキョロキョロしていたが、私たちの行動を見て素早く同じ行動をとってくれた。この訓練で伝えることの大切さを感じた。（1年生）
- ・今回の訓練でライフジャケットが以外と小さめにできていて、暑いと思ったので、避難時の気候によって色々と対応も変わるなと思った。例えば夏だったら汗や臭いなど、避難所の衛生環境も悪くなったりするので、常に先のことを考えて、災害の対策を考えたいと思った。（1年生）
- ・LHR 交流会で楽しんでいる最中に地震放送が始まり、とてもびっくりした。本物の災害もいつどのタイミングでくるのか分からないので、とっさに冷静な判断ができるのかとても不安になった。その後ライフジャケットを着用してグラウンドへ避難するのに、なかなか着用できない生徒もいた。だからこういう訓練は大切だと感じた。（2年生）
- ・園帯同のボランティアに参加した。思っていたよりもスムーズに避難できたと思う。「訓練」ということで交通整理をしてくれている方も多くいて、安全確保がある程度されていたのに対し、実際は、園児はもちろん多くの地域住民も混乱すると思うので、もっと色々なことに注意を払う必要があると感じた。（2年生）
- ・今回初めて海外生徒と一緒に避難訓練をして、言葉が違くと難しさが大きく増すのだと感じた。でも、こちらの身振り手振りや拙い英語で十二分に理解してくれ、初めてとは思えないほどスムーズに避難することができた。また訓練では、例年「歩いている人がいる」という反省は、僕が見る限りではとても少なかったと思う。来年度もこれを維持できればよいと思う。仮に大地震が発生した時、今回のように言葉が違う人がこの学校に避難してくれることも考えられるので、この訓練をした意義は大きかった。また今回出るであろう新たな課題を、次回克服することができるように取り組みたいと思う。（2年生）
- ・日高高校の教室にいた時、避難経路を僕たちは知っているがそれを知らない海外生徒が数人いるだけで、いつもの2倍ほど時間がかかったように感じた。これは海外生徒というわけだけでなく、日高高校のことを知らないからであるので、地域住民が避難してきた際にも同じことがいえるのではないだろうか。（3年生）
- ・毎年のことだが、避難経路が詰まってしまうためにグラウンド付近で迅速に動けなくなってしまうように感じる。災害時は速く避難したい人がほとんどで、転倒してしまうような人も出てくるのではないかと感じた。途中で怪我した人への対応はどうすればいいのかなど、「自助」だけでなく「共助」の面での訓練に参加してみたいと思った。（3年生）

【防災スクール】

- ・DVDを見て感じたことは、ただただ怖く感じた。なぜ1日も使って地震のことを勉強するのか、その意味が分かったような気がする。印象に残っているのは、僕たちはもう助けられる側でなく、助ける側だということです。そして自分の命は自分で守るということです。(1年生)
- ・非常に役立つ経験だと思った。消火器の使い方などは案外理解している人は少ないと思うので、非常に重要な体験ができた。また、時間をかけてもっと力を注いで、今回以上の様々な条件や状況に対応した学習をしてみたい。例えば、避難後の水の確保の方法、どうやって救難信号を出すのかなど、やっておけば少なくとも損することは無いと思うので、是非とも可能であればやっておきたい。(2年生)
- ・今回は防災スクールの運営する側でした。海外生徒も参加ということで、事前に消防署に行って打ち合わせをし、説明することの英訳を行った。だからより一層考えることが多くて大変でした。私自身、伝えることを通して処置の方法や搬送法をより学ぶことができた。また、この活動をしていく中で、私たち高校生が中心となれるんだということが身をもって感じた。(2年生)
- ・HUGをして外国人がけがをしている人、持病がある人などどこに配置すればよいのかとても難しかった。全員の要望を完璧に応えることは不可能であることが分かった。実際に自分たちで避難者の世話をするととなると上手くできないと思うので訓練の必要性を改めて感じた。(3年生)

5 成果と課題

- ・本校の中高生全員に防災学習を事前に実施したため、高い関心や意欲を持って訓練やスクールに取り組むことができた生徒が大半であったが、そうでない生徒も一部いた。
- ・各年齢層の参加によって緊張感を持った訓練となり、それぞれが責任や自覚をもって行動することができた。
- ・関係各所と防災や災害時に対する共通理解のきっかけ作りを、今回さらに深めることができた。
- ・今回はスタディツアーとの共同開催であり、海外生徒、メディアや多くの関係者の方がいたので、緊張感のある訓練やスクールになったが、来年度もこれくらいの意識や雰囲気を取り組めるかが課題である。

防災学習



避難訓練①



避難訓練②



DVD 学習



パーティション組立撤去



応急処置



消火訓練



搬送法



HUG



防災 FM



校外ツアー①



校外ツアー②



V 資料

運営指導委員会の記録

第1回

1 日時 2018年（平成30年）8月30日（木）13:30～15:30

2 場所 日高高等学校 会議室

3 次第

- (1) 開会
- (2) 和歌山県教育委員会挨拶
- (3) 学校長挨拶
- (4) 運営指導委員及び日高高等学校担当者紹介
- (5) 委員長・副委員長選任
- (6) 委員長・副委員長挨拶
- (7) 事業説明
- (8) 協議

4 協議記録(主な意見)

- ・海外研修に関する意見やアドバイス

カナダ研修（テーマ：移民の歴史）に関する訪問先の提案。日系移民の歴史などをより深く学習できる施設を紹介していただいた。また、現地高校生との協働学修の際のテーマ設定に関するアドバイスをいただいた。

ベトナム研修（テーマ：地域産業）に関して、現地の状況や訪問先についての情報を提供していただくとともに、協力の申し出をいただいた。

- ・論文作成の取組に関する質問やアドバイス

3年生のSG課題研究Ⅲにおける論文作成の分量や進捗状況についての質問があった。また、論文を書かせていく上での動機付け、意欲を高めるためのアドバイスをいただいた。

第2回

1 日時 2019年（平成31年）3月7日（木）

2 場所 日高高等学校 会議室

3 次第

- (1) 開会挨拶
- (2) 事業説明
- (3) 質疑応答
- (4) 協議等
- (5) 閉会挨拶

平成30年度実施教育課程表

全日制課程 普通科

和歌山県立日高高等学校

学科	学年	標準 単位数	普通科								履修 単位数	教科別履 修単位数	備考 選択上の留意点		
			1年	2年				3年							
				共通	I類 文系	理系	II類 文系	理系	I類 文系	理系				II類 文系	理系
教 科 ・ 科 目	国語	国語総合	4	5								5	14,15	※3年文系地理歴史 △の中から1科目選択	
		現代文B	4	2	2	2	2	2	2	2	2	2			4
		古典B	4	3	3	3	3	3	2	3	2	5,6			
	地理 歴史	世界史A	2	2	2	2	2					2			
		日本史A	2	2		2					0,2				
		地理A	2					2		2		0,2			
		世界史探究						△4		△4		0,4			
		日本史探究						△4		△4		0,4			
	公民	現代社会	2	2								2			
		公民探究						2	2	2	2	2			
	数学	数学I	3	3								3			
		数学II	4		4	4	4	4				4			
		数学III	5						■5		■5	0,5			
		数学A	2	2								2			
		数学B	2		2	2	2	2				2			
		数学理解I							3	◆4	3	◆4	3,4		
		数学理解II							★2	◆3	2	◆3	0,2,3		
	数学探究								■2		■2	0,2			
	理 科	物理基礎	2	2								2			
		物理	4			○2		○2		◎4		◎4	0,6		
		化学基礎	2		○2	2	○2	2				0,2			
		化学	4			2	2		3		3	0,5			
		生物基礎	2	2								2			
		生物	4			○2		○2		◎4		◎4	0,4,6		
		地学基礎	2		○2		○2					0,2			
		化学探究							●2		●2		0,2		
		生物探究							2		2		2		
		地学探究							●2		●2		0,2		
保 健 体 育	体育	7~8	3	2	2	2	2	2	2	2	2	7			
	保健	2	1	1	1	1	1					2			
	スポーツ探究							*2				0,2			
芸 術	音楽I	2	*2								0,2				
	音楽II	2		*2							0,2				
	音楽III	2						*2			0,2				
	美術I	2	*2								0,2				
	美術II	2		*2							0,2				
	美術III	2						*2			0,2				
	書道I	2	*2								0,2				
	書道II	2		*2							0,2				
	書道III	2						*2			0,2				
生活の書							●2			0,2					
外 国 語	コミュニケーション英語I	3	4								4				
	コミュニケーション英語II	4		4	4	4	4				4				
	コミュニケーション英語III	4						4	4	4	4	4			
	英語表現I	2	2					2	2	2	2	2			
	英語表現II	4		2	2	2	2	2	2	2	2	4			
	英文読解I					2					0,2				
英文読解II								2		0,2					
家 庭	家庭基礎	2		2	2	2	2				2				
	生活文化							★2			0,2				
情 報	情報の科学	2	2								2				
普通科目計				30	30	30	30	30	30	30	30	90			
合 計			30	30	30	30	30	30	30	30	30	90			
ホームルーム 活動			1	1	1	1	1	1	1	1	1	3			
総合的な学習の時間			1	2	2	2	2	1	1	1	1	4			
総 合 計			32	33	33	33	33	32	32	32	32	97			

平成30年度実施教育課程表

全日制課程 総合科学科

和歌山県立日高高等学校

学科		標準単位数	総合科学科			履修単位数	選択上の留意点	
			1年	2年	3年			
学年		標準単位数	総合科学科			履修単位数	選択上の留意点	
類型			1年	2年	3年			
教 科 目	国語	国語総合	4	4		4	※2年 ★の中から1科目選択 ※3年 「■4または■2+■2から2科目及び▲2」 または 「■4または■2+■2から1科目及び▲3から1科目及び△3」を選択 ※1年 ○の中から1科目選択 ※3年 □3+□2または□5を選択 地理探究, 世界史探究, 日本史探究, 数学探究, ナチュラルサイエンスⅠ, ナチュラルサイエンスⅡ, ナチュラルサイエンスⅢ, ナチュラルサイエンスⅣ, ナチュラルサイエンスⅤ, ナチュラルサイエンスⅥ, 理数物理探究, 理数化学探究, 理数生物探究, 情報数学は学校設定科目 課題研究で総合的な学習の時間2単位を代替	
		現代文B	4		2	2		4
		古典B	4		3	3		6
	地理歴史	地理A	2		★2			0, 2
		世界史A	2		2			2
		日本史A	2		★2			0, 2
		地理探究				■4		0, 4
	公民	世界史探究				■4		0, 4
		日本史探究				■4		0, 4
		現代社会	2	2				2
	体育保健	倫理	2			■2		0, 2
		政治・経済	2			■2		0, 2
		体育	7~8	3	2	2		7
	芸術	保健	2	1	1			2
		音楽Ⅰ	2	○2				0, 2
		美術Ⅰ	2	○2				0, 2
	外国語	書道Ⅰ	2	○2				0, 2
		コミュニケーション英語Ⅰ	3	3				3
		コミュニケーション英語Ⅱ	4		4			4
		コミュニケーション英語Ⅲ	4			4		4
英語表現Ⅰ		2	2			2		
家庭	英語表現Ⅱ	4		2	2	4		
	家庭基礎	2	2			2		
普通科目計			19	18	17, 21	54, 58		
専門教科 (理数)	理数数学Ⅰ	4~8	5			5		
	理数数学Ⅱ	6~10		6		6		
	数学探究				□3	0, 3		
	理数数学特論	4~10			□5	0, 5		
	ナチュラルサイエンスⅠ		6			6		
	ナチュラルサイエンスⅡ			2		2		
	ナチュラルサイエンスⅢ			2		2		
	ナチュラルサイエンスⅣ			2		2		
	ナチュラルサイエンスⅤ				▲2	0, 2		
	ナチュラルサイエンスⅥ				□2	0, 2		
	理数物理探究				▲3	0, 3		
	理数化学探究				△3	0, 3		
理数生物探究				▲3	0, 3			
課題研究	1~2		2		2			
情報数学				2	2			
専門科目計			11	14	9, 13	34, 38		
合計			30	32	30	92		
ホームルーム活動			1	1	1	3		
総合的な学習の時間			1	0	1	2		
総合計			32	33	32	97		

生徒プレゼンテーション資料 インドネシア研修 現地プレゼン PPT (一部抜粋)



(3) **Bad point of evacuation drill**

- Lack of awareness
- Attitude
- Assumption

→ **Need to improve Awareness**



(5) **How to make simple toilet**

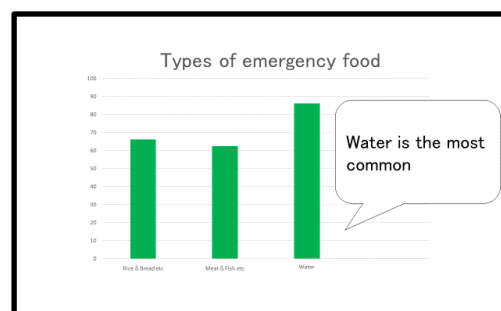
Materials

- cardboard
- newspaper
- plastic bag
- gum tape



(7) **Supposable reason**

It is believe that a huge earthquake will occur at a probability of 70%~80% within 30 years



(9) **Do you know Alpha rice??**

Process of making alpha rice out of raw rice

1. To cook raw rice
2. To dry the cooked rice


↓

The dried rice is called alpha rice



生徒プレゼンテーション資料 カナダ研修 現地プレゼン PPT① (一部抜粋)

(1) Mio village
in Wakayama prefecture



(2) In 1977 Manzo Nagano went over to British Columbia province

The first immigrant

Japanese immigration continued until 1928

They did not have the voting rights

(3) In 1941, World War II



<http://moon-water.org/beautiful/town/20181122/canada/index.htm>

(4) When the World War II broke out...

Japanese Canadians confiscated their property and received detention

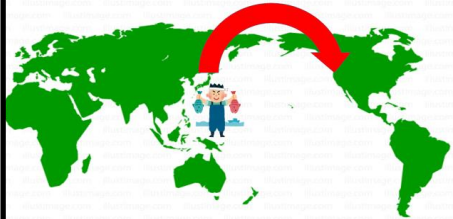
After the World War II ...

Japanese Canadians were released from detention and regained their citizenship

Why?


(5) Why were Japanese Canadians released from detention and regained their citizenship?

Because the treaty was signed

(6) 

(7) It was difficult to get fruits in Canada in winter

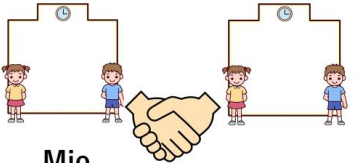
Wenzhou mandarin orange was welcomed



(8) Current situation of Mio village



(9) Mio elementary school King street school



(10) museum

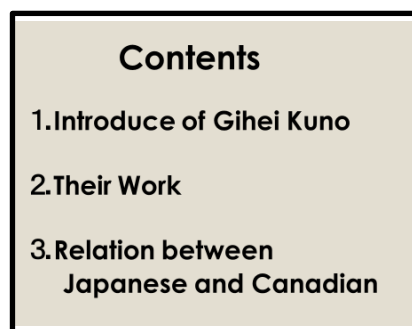


生徒プレゼンテーション資料 カナダ研修 現地プレゼン PPT② (一部抜粋)

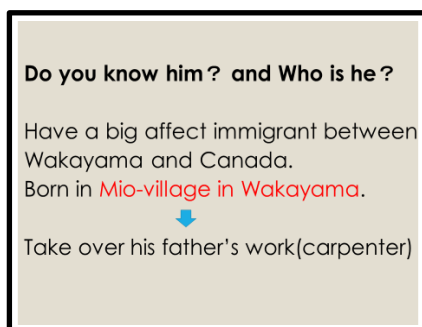
(1)



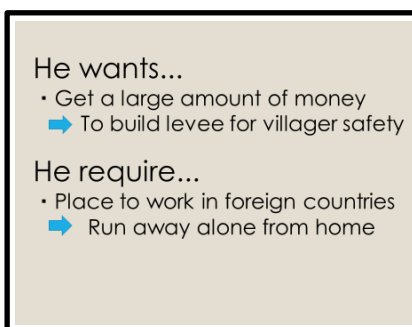
(2)



(3)



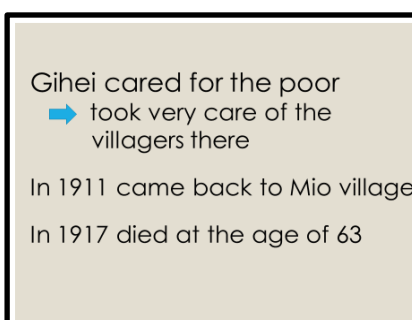
(4)



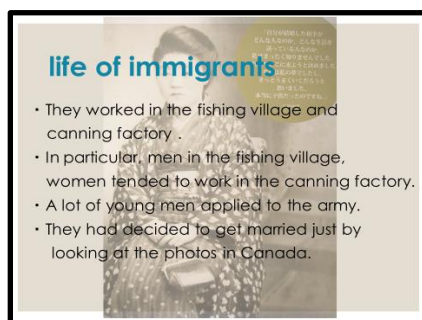
(5)



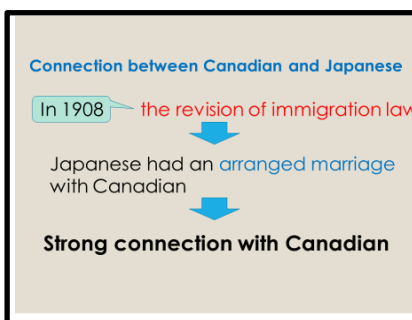
(6)



(7)



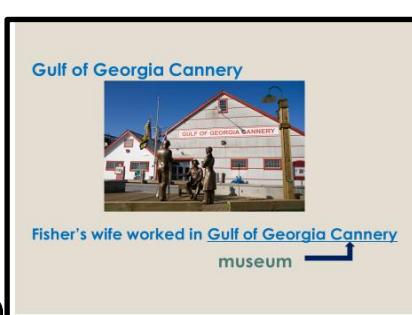
(8)



(9)



(10)



生徒プレゼンテーション資料 ベトナム研修 現地プレゼン PPT

(1)

TO ACTIVATE LOCALS
 THROUGH INDUSTRY CONCERNED
 WITH THE SERVICE OF FOOD

MEMBER
 YAMAGUCHI, KURA, KOBATA, ISII,
 TANIGUCHI, NARUKAWA, HIRAYAMA

(2)

OUR GOAL

CHAIN STORE < LOCAL STORE

To utilize attractiveness of local stores which chain stores don't have.
 => Using local foods

(3)

OUR RESEARCH

QUESTIONNAIRE

QUESTION ITEMS
 • LENGTH OF MANAGEMENT • CUSTOMER STRATUM
 • CONNECTION WITH LOCALS ETC.

RESPONDENT STORES AND RESTAURANTS
 RAMENBAKUMATSU/HOKKAIRAMEN/MARUKINTONKATSUTEI/ASAHIDOU/BAMBU
 /あんちゃん/炭焼亭/ボナベティ・ヤナギヤ/花みつ

(4)

RESULTS OF THE QUESTIONNAIRE

EVERY STORE DEALS WITH LOCAL FOODS.

REASONS • TO GET ADDED VALUE
 • TO PROVIDE UNIQUE LOCAL FOODS, SUCH AS WILD GAME, HOME-GROWN
 VEGETABLE AND FRUITS

DEVICES, PUBLIC RELATIONS
 : SNS, LOCAL NEWSPAPERS, MAGAZINES
 TO IMPROVE SERVICES TO CHANGE ITEMS AND MENUES

(5)

OUTCOME OF FIELDWORKS

FACULTY OF TOURISM
 WAKAYAMA UNIV. →

JAPAN AGRICULTURAL COOPERATIVES STORE
 KINOSATO MEKKEMONHIROBA

(6)

WAKAYAMA UNIVERSITY

LOCAL INDUSTRIES X VITALIZE LOCAL

Utilize local resources

(7)

JAPAN AGRICULTURAL COOPERATIVES STORE
 KINOSATO MEKKEMONHIROBA

FOUNDATION NOV. 3. 2000 (19 YEARS AGO)
 ANNUAL NUMBER OF COSTUMERS 701,000
 ANNUAL TURNOVER ¥2,890,000,000
 CUSTOMER TRANSACTION ¥4,129
 RATIO OF LOCAL FOODS 76.6%

direct sales store

Super Market

Farmers Store

(8)

JA KINOSATO MEKKEMON HIROBA

Importance of the first industry

Farmers → Food self-support → Regional vitalization

(9)

THE END

THANK YOU VERY MUCH


生徒ポスター資料 2018 全国 SGH フォーラム


Title	HIDAKARD --Simulating Evacuation Center Management with Foreigners--		
Key words	local disaster prevention, Hinanzyo Unei Game(HUG), multicultural coexistence	School	2808 Wakayama Prefectural Hidaka High School

1. Introduction


Local Disaster Prevention "Improving Disaster Awareness" & "Multicultural Coexistence"

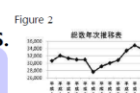
Background

 **Indonesia**
Lack of awareness of disaster preparedness

 **Japan**
Support for foreigners in time of a disaster



 **HIDAKA H.S.**
Little chance of interacting with foreigners



Hypothesis

HUG × Support for Foreigners in Time of a Disaster × Japanese in the Countryside
Multicultural Coexistence

Figure 1: The Number of Foreign Residents (Justice Ministry) --References 3)

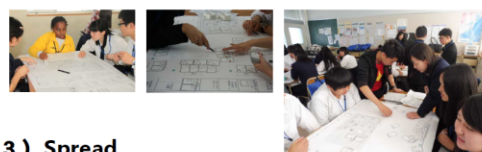
Figure 2: The Number of Foreign Tourists to Wakayama (Wakayama Prefecture)--References 2)



2. Methods**1) Development**

- Point 1 : English & Japanese
- Point 2 : More Foreigners
- Point 3 : Diversity of Religion & Gender

**2) Simulation & Analysis**

Research Date and Time : Oct. 29th, 2018 (75min.)
Research Object : 303 people from 8 countries
Research Method : Questionnaire

**3) Spread****3. Results**

	Group A	Group B	Group C
Members	202	17	4
Guests	65	12	3
Groups	44	4	1
Tools used	HIDAKARD	HUG	HIDAKARD
Languages used	English	Japanese	Japanese
1 Help studying disaster prevention	49%	62%	100%
2 Feel the necessity of improving English communication skills	58%		
3 Cooperate with others	85%	71%	100%

4. Analysis

- (1) HIDAKARD is **effective**.
- (2) Careful **explanation of the rules** is necessary.

5. Conclusion

Findings from the research:

- (1) **HIDAKARD** can provide us an opportunity to think of **shelter management**.
- (2) **HIDAKARD** makes us realize the necessity to improve our **English communication skills**.
- (3) **HIDAKARD** is useful for introducing to foreigners **disaster prevention education** in Japan.

HIDAKARD can be expected to be utilized abroad next year to offer a tool to other countries to help improve disaster prevention awareness among local residents.

Acknowledgement

- Madania Secondary School in Jakarta, Indonesia
- Ryubunsha Printing Office in Gobo-city, Wakayama
- Participants in High School Students Summit on "World Tsunami Awareness Day" 2018 in Wakayama
- Students, Teachers, All members of Hidaka High School

References

- 1) "Hinanzyo Unei Game (HUG)" Shizuoka Prefecture
- 2) "Tourist Dynamic Statistics Report (2009-2017)" Wakayama Prefecture
- 3) "The Number of Foreign Residents at the end of the fiscal year of 2017 (definite value)" March 27th, 2018, Justice Ministry's Immigration Bureau
- 4) "The System of Information Coordinators for Foreigner Support in a Time of Disasters" March, 2018, Ministry of Internal Affairs and Communications

3 年次（平成 30 年度）取組概要ポスター

和歌山県立 日高高等学校

平成30年度 指定3年目の取組

研究開発構想名 **翔べ 日高から 世界へ ～地方を創生するグローバルリーダーの育成～**

目的 魅力ある就業先や雇用の創出等に取り組み
地方を創生していく人材を育成する

方法 1) 県内で高校生活を送る今、地元の魅力と課題に気づく（文化、産業、移民、防災）
2) 課題研究や海外研修を通してグローバルスキルを身につける

背景 地方にとっての悪循環を断ち切る必要性
（若者の県外流出、地方の過疎化、経済の減退）

キーワード
地方創生

グローバルスキル（本校独自の「付けたい力」8項目）

①やる気 ②想像力 ③コミュニケーション力 ④グローバル力 ⑤協働力 ⑥マネジメント力 ⑦発信力 ⑧参加・参画力

I 個人力 II チーム力 III 行動力

◇日高から（課題研究）

SG課題研究Ⅰ—基礎研究—（1学年）

- ・ 地域の実態や現状の理解
- ・ 探究活動に必要なスキルの学習



1学年 気づく

10月～12月 防災
1月～3月 移民
4月～6月 文化
7月～9月 産業

SG課題研究Ⅱ—探究活動—（2学年）

- ・ 地域課題に関する研究
- ・ 成果発表会で探究成果発表



2学年 学ぶ

10月 中間発表会
3月 成果発表会
6月 研究テーマ決定
4月 研究分野決定




1 学年（授業） 2 学年（授業・中間発表会）

SG課題研究Ⅲ—発信—（3学年）

- ・ 研究成果を論文にする
- ・ 英語要旨作成



3学年 広げる

◇世界へ（海外高校生との交流、研究活動）

裾野を広げる



JICA 研修 世界津波の日サミット・スタディツアー

研究を深める

海外研修

カナダ（移民・文化）11月
和歌山県人会（移民の歴史）
現地インタビュー調査（移民）現地高校（協働学習）

インドネシア（防災・文化）10月
ERIA（東アジア経済）JICA（国際支援）
世界遺産（被災と復興）現地高校（協働学習）

ベトナム（産業・文化）1月
日本大使館、日本総領事館（日越外交）
JICA、VJCC（国際支援）ミラヒューマン（人材育成）
NIC マルプロセッシング（産業）現地高校（協働学習）



アジアオセアニア高校生フォーラム
7/24-7/27（和歌山市） 2年生3名が参加。
本校における「避難所マニュアル」を独自に作成し、「津波A」カテゴリーにて英語発表を行った。全体会司会や開会宣言も英語で行った。

高校生津波サミット
10/31・11/1（和歌山市）
「世界津波の日」2018
高校生サミット in 和歌山
に5名が参加。議長、
総司会を務めた他、
分科会では「和歌山ネ
ットワークの創設」を
提案した。

SGH全国フォーラム
12/15（東京都）
防災分野の2年生5名
が参加。多文化共生の
視点で開発した「避難
所運営シミュレーションカード」
について英語ポスター
発表を行った。



SGH通信

地域産業分科会・テーマ一覧

- ①農家の後継者不足
- ②スターチスで御坊を活性化
- ③プラスチックの危機
- ④地域の活性化
- ⑤地元の飲食業を通じた地域活性化
- ⑥地域活性化のために
- ⑦地域の産業について
- ⑧黒竹と御坊人形（地域の伝統文化）

地域産業の中間発表会は理科棟の化学実験室で開催され、各班がこれまでの取組経過とこれからの見通しについて発表を行いました。内容は昨年度からの継続テーマである「スターチスを使った地域活性化」のほか、「農家の後継者問題」「地域の伝統産業」等多岐にわたり、英語での発表にチャレンジした班も2班ありました。指導助言には和歌山大学の岸上光克（きしがみ みつよし）教授をお迎えしました。どの発表も後半戦ではどのように内容が深化していくか、楽しみなものばかりです。



地域文化分科会・テーマ一覧

- ①愛する故郷に観光客を
- ②金山寺味噌を食べてもらおう
- ③方言～今まで明かされてこなかった語尾～
- ④歴史ある祭りを後世に残すために～御坊祭り～
- ⑤国道42号線から見る和歌山
- ⑥私たちが使っている方言
- ⑦安珍・清姫を世界へ
- ⑧道成寺の民話

地域文化の発表は「道成寺」「方言」「祭り」など、毎年研究が行われているテーマもあれば、今までにはなかった「国道42号線」に着目するグループもあり、多様な発表がなされました。

また指導助言には、和歌山大学の岩野清美（いわの きよみ）准教授をお迎えし、講評をいただきました。特に「安珍・清姫を世界へ」というテーマで研究をしているグループは、いかにして道成寺物語を発信していくかを教授に質問している姿が印象的でした。

今回の反省を活かし、最終発表にどう繋げていくのか、これからの取組に期待していきたいです。

2学年 SG課題研究II（総合的な学習の時間） 中間発表vol.2

発表会は、指導助言をしてくださった大学研究者や和歌山県教育委員会指導主事のほかに、福島県の3名の先生方にも参観していただきました。先生方からはそれぞれに評価コメントをいただいています。代表して、福島県立会津第二高等学校の小松直人先生からのコメント文を以下に紹介します。

質の高い発表を、全員が行えるという学校は、日本に数えるほどしかないと思います。素晴らしい発表でした。最終発表に向けて、さらに研究を深めていってください。“Think Globally, Act Locally”という言葉がありますが、地域課題について考えることは、日本の課題、世界の課題を考えることにつながっています。実際に福島県でも、観光客の誘致、防災などは、共通の課題です。（福島はこれらに加え、原発の後処理、風評被害対策があります。）

是非、目の前の課題の解決に精一杯取り組みながら、他の地域、そして世界に視野を広げていってください！

和歌山県立 日高高等学校 SGH通信 第9号

2018年11月2日





SGH Annual Presentation 2019 will be held !

2019 Program

Day 1 : Presentation by Topic

Date : Wednesday, March 6, 2019

8:50am to 11:20am

Place : Hidaka High School

Classrooms by topic

Language : Japanese & English

Program Schedule :

- ◇Opening Remarks & Orientation
- ◇Presentation by Groups
- ◇Student Vote

Day 2 : Plenary

Date : Thursday, March 7, 2019

11:40am to 16:00pm

Place : Hidaka High School

Gymnasium

Language : Japanese & English

Program Schedule :

- ◇Poster Session
- ~Lunch Break~
- ◇Opening Remarks
- ◇Presentation
- ◇Adjournment



Presentation by Topic



Poster Session



Presentation by Winners

▲ SGH Annual Presentation 2018

SGH Annual Presentation 2019 will be held on March 6 & 7. Preparing for those days, 2nd Grade Students are arranging their final presentation now.

On the Plenary day, 1st Grade Students will have a good opportunity to learn about presentation skills by observing presentation with winner groups. Let's enjoy the event !

VOLUNTEER WANTED

Management Staff : MC, Receptionist, Handout Preparation, etc.

For More Information : Contact Sakurai at the Staff Room by Feb.7

平成28年度指定スーパーグローバルハイスクール

研究開発実施報告書・第3年次

平成31年3月発行

発行者 和歌山県立日高高等学校

〒644-0003 和歌山県御坊市島45

TEL 0738-22-3151 FAX 0738-23-2922